

松前町こどもの生活に関する調査

令和8年1月

松前町保健福祉部子育て支援課

I 松前町子どもの生活に関するアンケート調査の概要

1 調査目的

国において、令和6年6月12日に「子ども・若者育成支援推進法」を改正し、ヤングケアラーを定義づけるとともに、国及び地方公共団体が各種支援に努めるべき対象にヤングケアラーを明記した。このような国の動向を踏まえ、本町としても、ヤングケアラーの実態を把握し、実情や児童、生徒が求めている支援に沿った今後のヤングケアラー支援体制を構築するために、実態調査を行う。

2 調査項目

令和4年7月に愛媛県が県内の公立小学校及び県立特別支援学校に通う小学5年生、小学6年生の児童、公立中学校、県立高等学校、県立中等教育学校及び県立特別支援学校に通う中学1年生から高校3年生までに該当する生徒に対して実施した調査項目を基本として、本調査を実施した。

3 調査方法

(1) 対象者

- ア 町内小学校に通う小学5年生及び小学6年生の児童
- イ 町内中学校に通う中学1年生、中学2年生及び中学3年生の生徒
- ウ 町内在住の平成19年4月2日から平成22年4月1日までに生まれた子ども

(2) 調査期間

令和7年10月20日から令和7年11月30日まで

(3) 回答方法

専用Webサイト上で回答する方法で実施し、記名を任意とした。

4 回答状況

調査対象		回答状況	
学年	人数	回答数	回答率
小学生	570 人	498 人	87.4%
小学5年生	267 人	213 人	79.8%
小学6年生	303 人	281 人	92.7%
不明		4 人	
中学生	842 人	716 人	85.0%
中学1年生	295 人	273 人	92.5%
中学2年生	278 人	221 人	79.5%
中学3年生	269 人	214 人	79.6%
不明		8 人	
16歳~18歳	897 人	81 人	9.0%
16歳	306 人	32 人	10.5%
17歳	291 人	27 人	9.3%
18歳	300 人	22 人	7.3%
合計	2,309 人	1,295 人	56.1%

Ⅱ 調査結果

1 一緒に住んでいる人

一緒に住んでいる人は、小学生、中学生及び16歳から18歳までの子ども（以下「16歳～18歳」という。）のいずれも「母親」が9割以上と最も多く、次いで「父親」が8割前後となっている。「兄・姉」または「弟・妹」と一緒に住んでいると回答した割合は、全年代において、4割から5割程度であった。

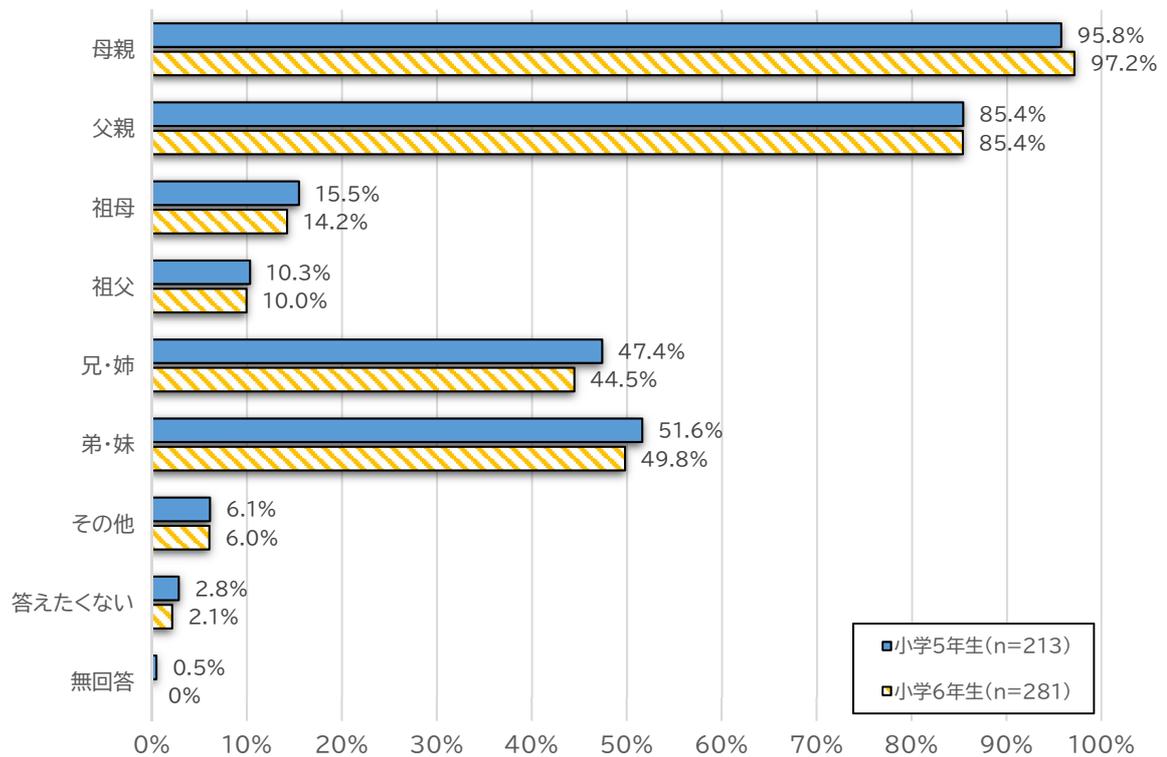


図1 一緒に住んでいる人(小学生)※複数回答あり

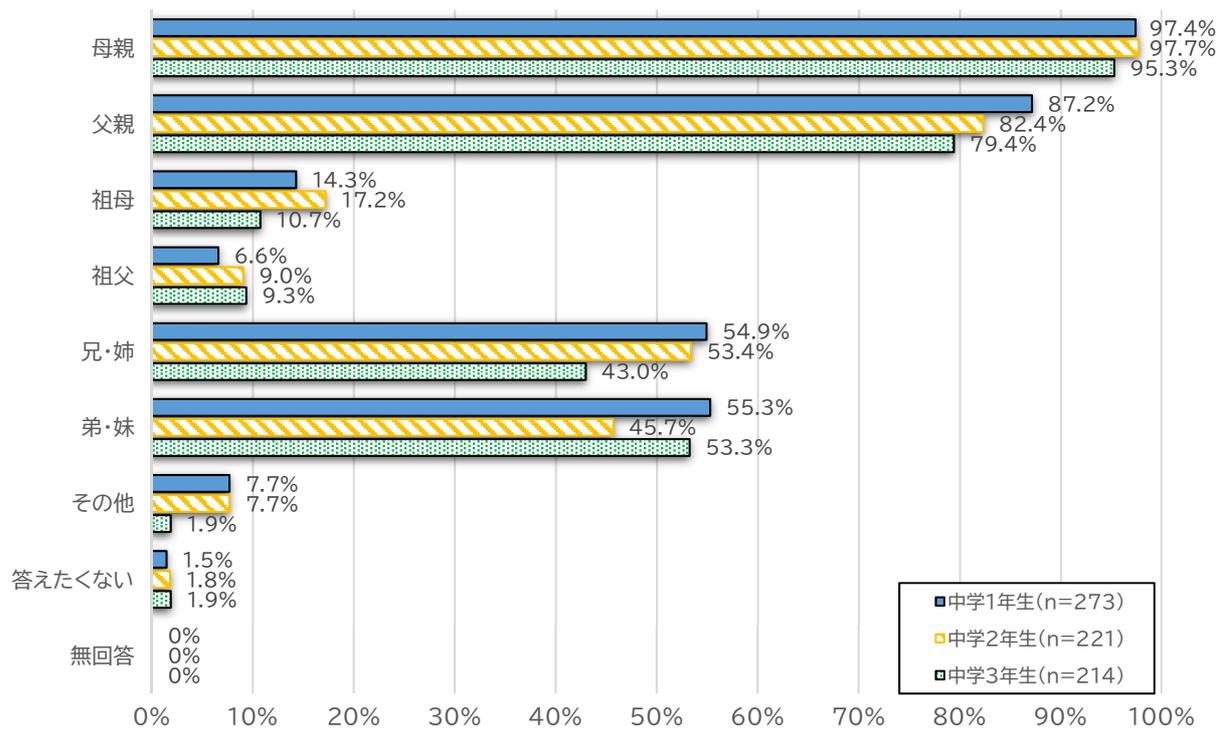


図2 一緒に住んでいる人(中学生)※複数回答あり

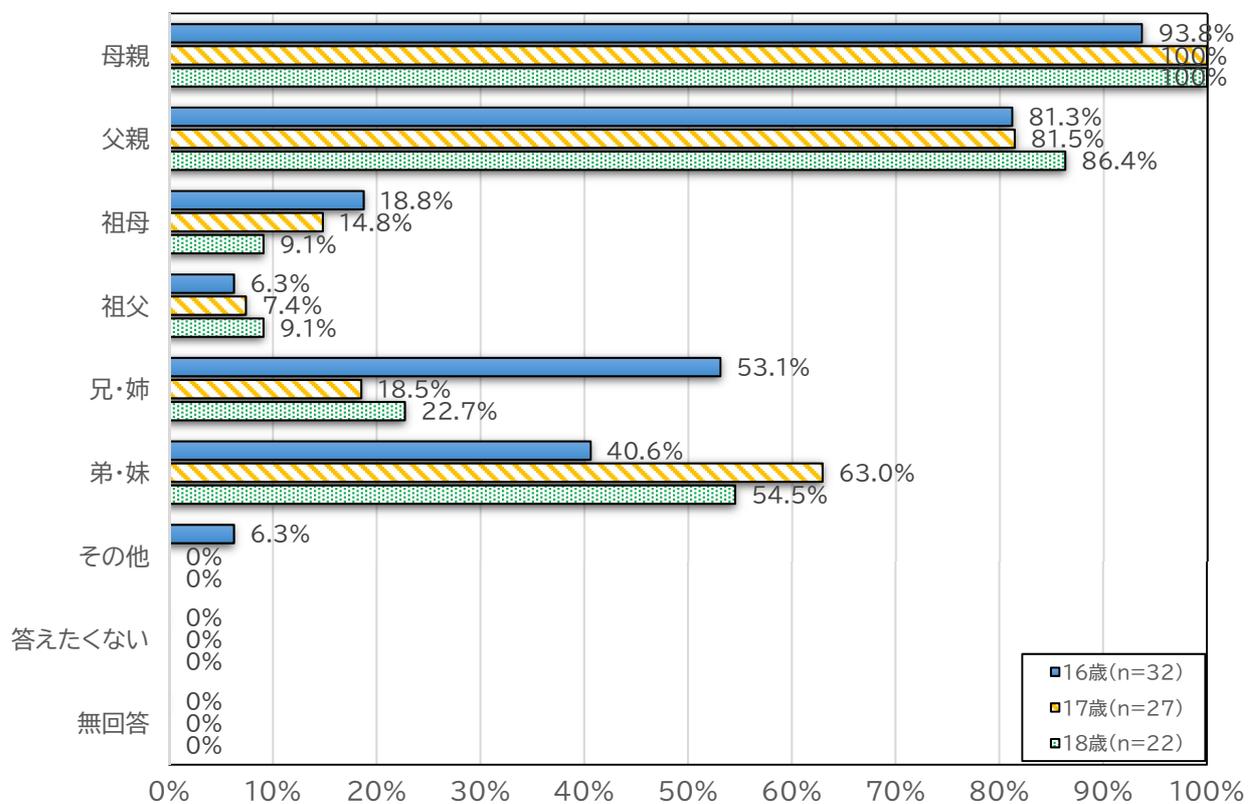


図3 一緒に住んでいる人(16歳~18歳)※複数回答あり

2 お世話をしている人

お世話をしている人が「いる」割合は、小学生が18.3%、中学生が7.7%、16歳～18歳が2.5%で、お世話する相手はいずれも「きょうだい」が最も高く、身近な家族のお世話が多い状況となっている。

(1) 小学生 (n=498)

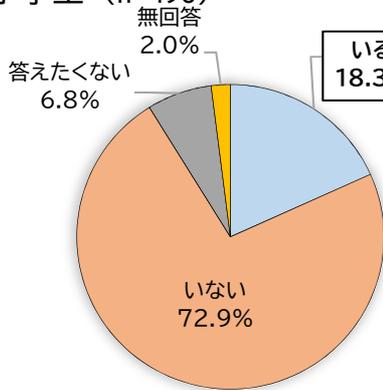


図4 お世話をしている人がいると答えた割合(小学生)

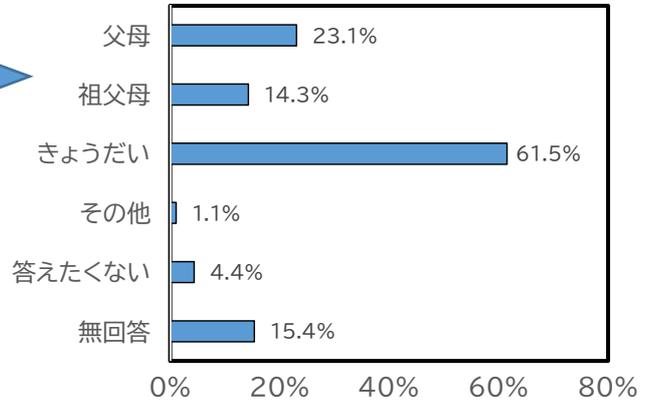


図5 お世話の相手
(小学生 n=91)

(2) 中学生 (n=716)

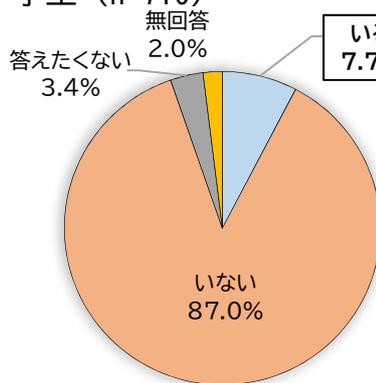


図6 お世話をしている人がいると答えた割合(中学生)

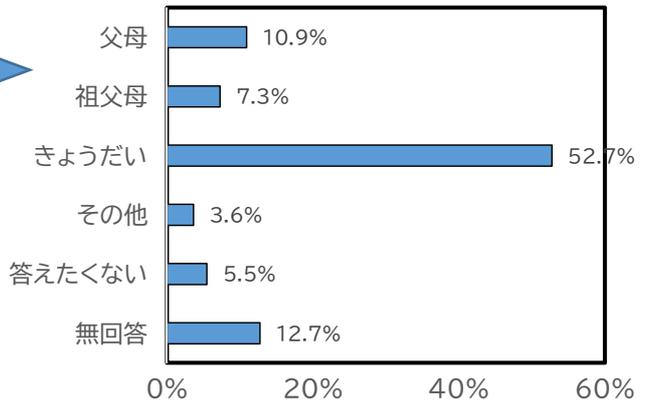


図7 お世話の相手
(中学生 n=55)

(3) 16歳～18歳 (n=81)

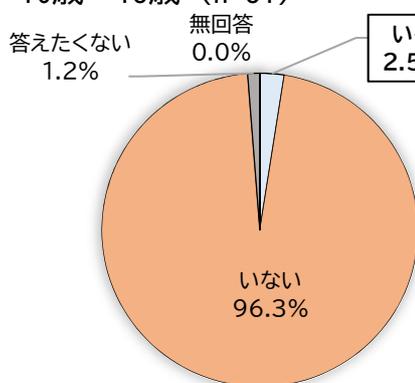


図8 お世話をしている人がいると答えた割合
(16歳～18歳)

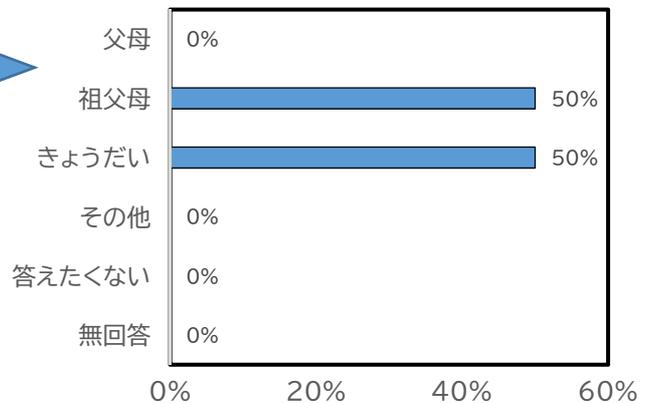


図9 お世話の相手
(16歳～18歳 n=2)

3 お世話をする理由

(1) 父母をお世話する理由

小学生、中学生のいずれも、「わからない」と回答した割合が最も高くなっている。

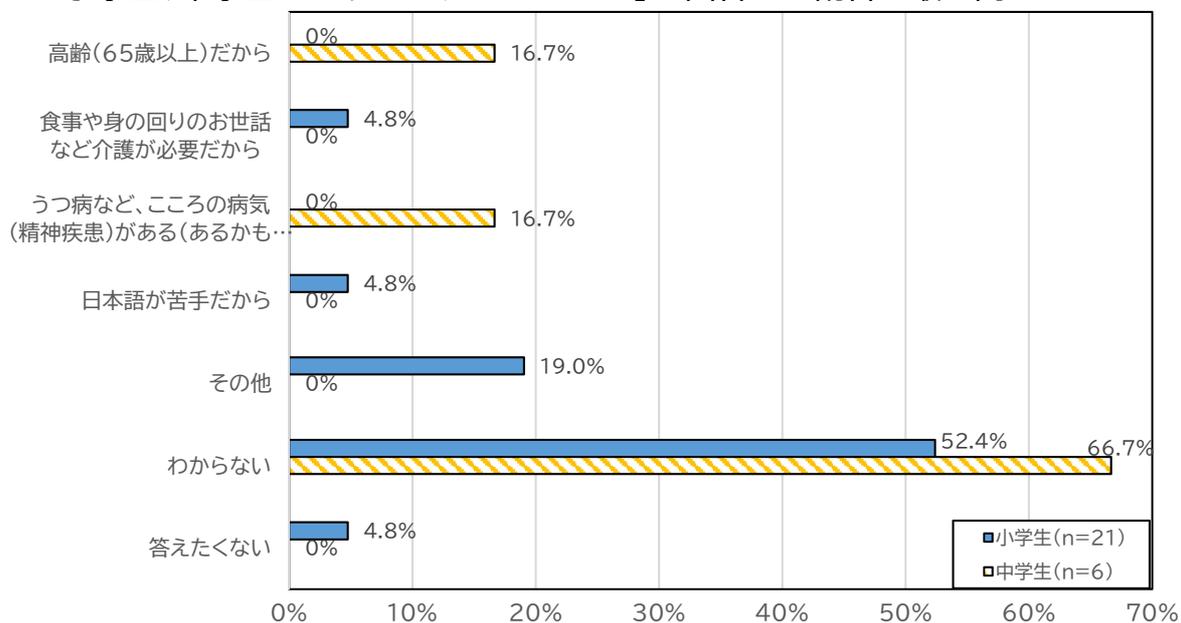


図 10 父母をお世話する理由

(2) 祖父母をお世話する理由

すべての年代で、「高齢(65歳以上)だから」と回答した割合が最も高くなっている。

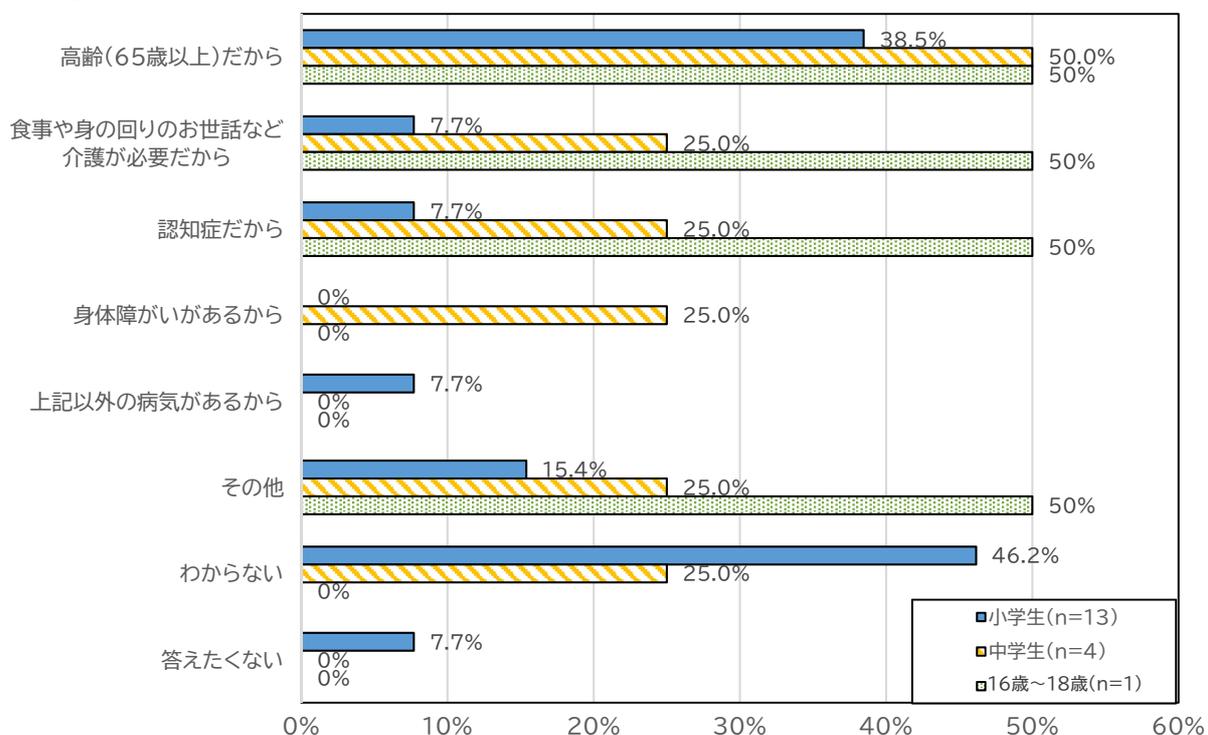


図 11 祖父母をお世話する理由

(3) きょうだいをお世話する理由

小学生及び中学生では、「まだ小さな子どもだから」と答えた割合が最も高く、次いで、小学生では「わからない」、中学生では「知的障がいがあるから」と回答した割合が高かった。

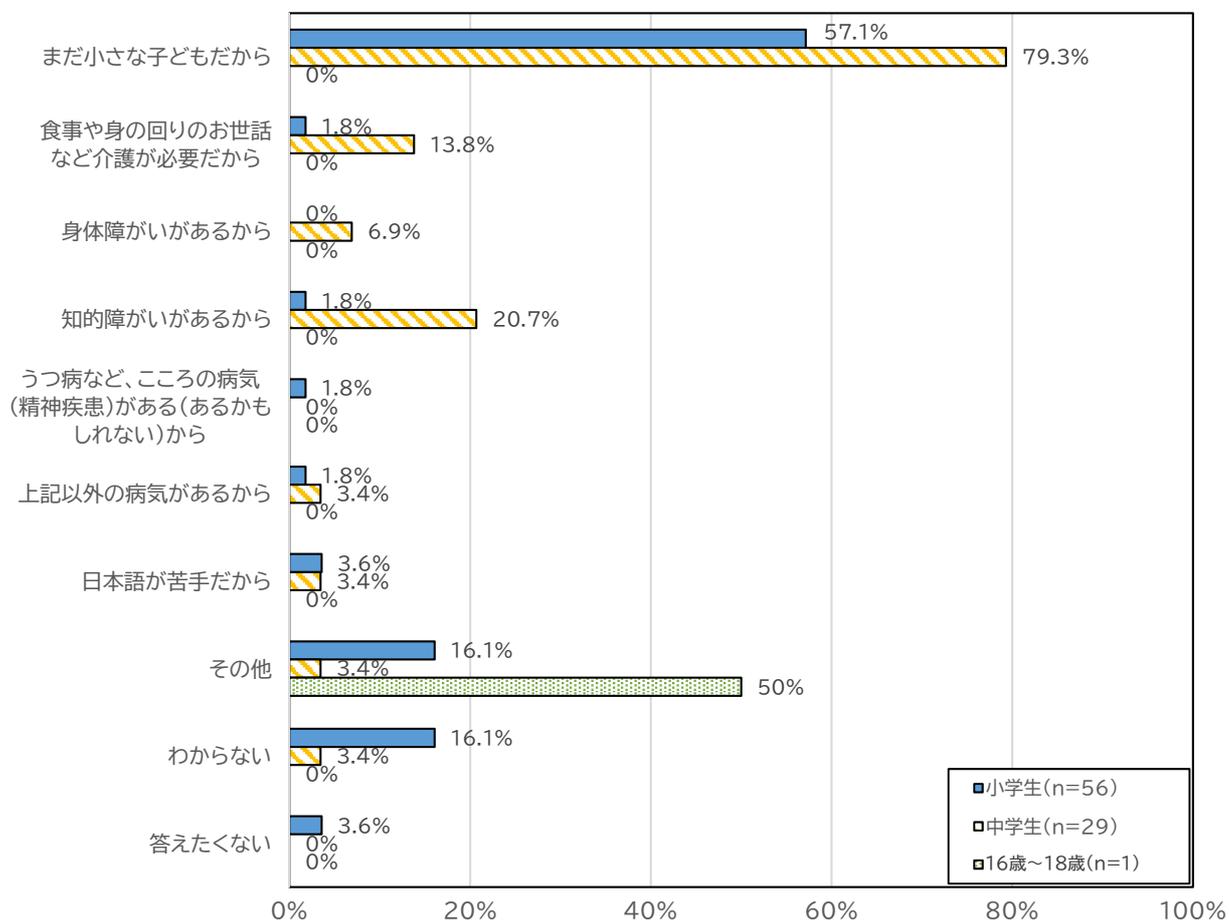


図 12 きょうだいをお世話する理由

4 お世話の内容

(1) 小学生がするお世話

お世話する相手が「父母」または「祖父母」の場合、「食事の準備や掃除、洗濯などの家事」及び「買い物や散歩など外出の付き添い」の割合が、「きょうだい」が相手の場合は、「見守り」が最も高くなっている。

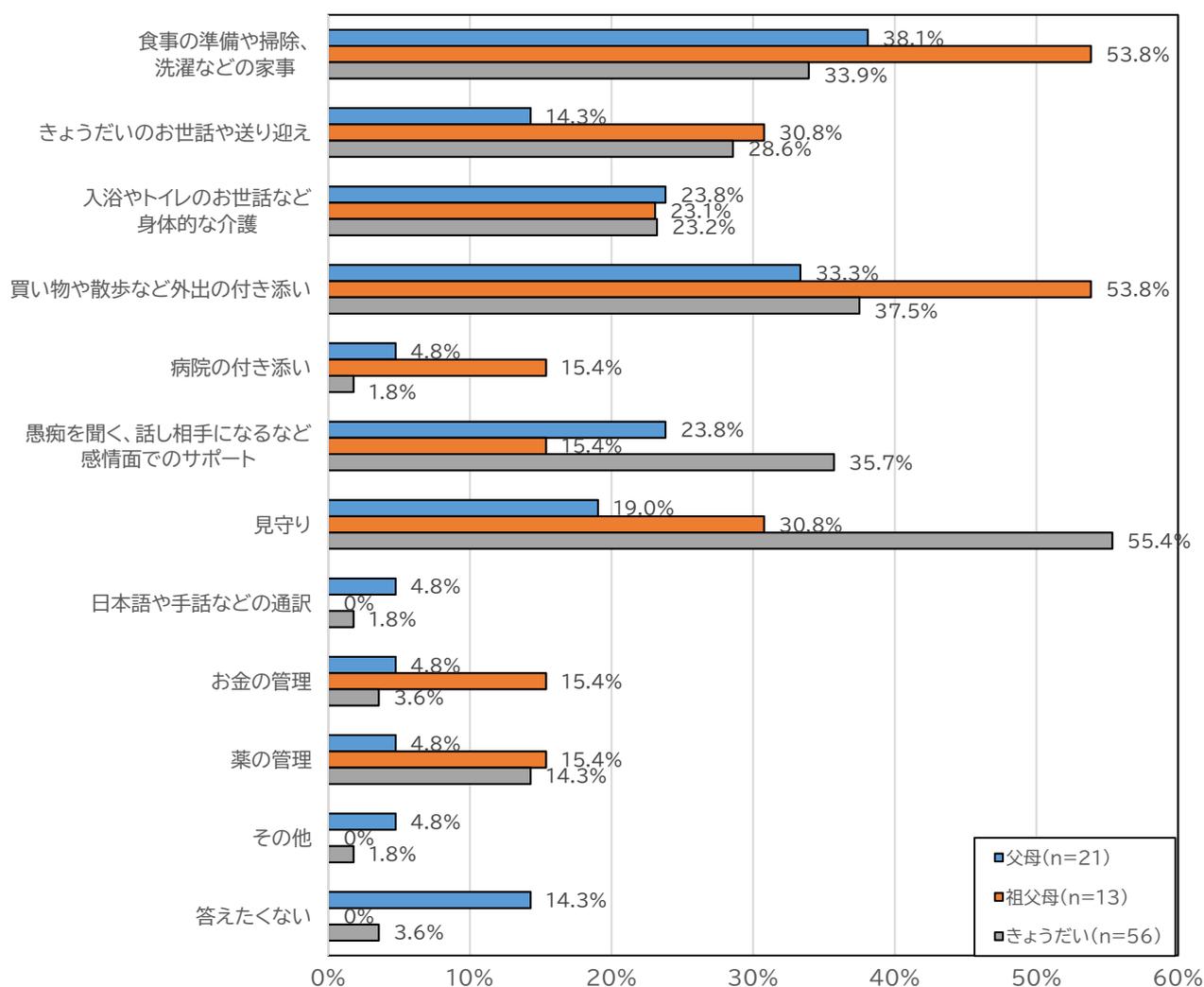


図13 小学生がするお世話の内容

(2) 中学生がするお世話

お世話する相手が「父母」の場合は、「食事の準備や掃除、洗濯などの家事」が、「祖父母」の場合は、「買い物や散歩など外出の付き添い」が、「きょうだい」の場合は「見守り」が最も高くなっている。

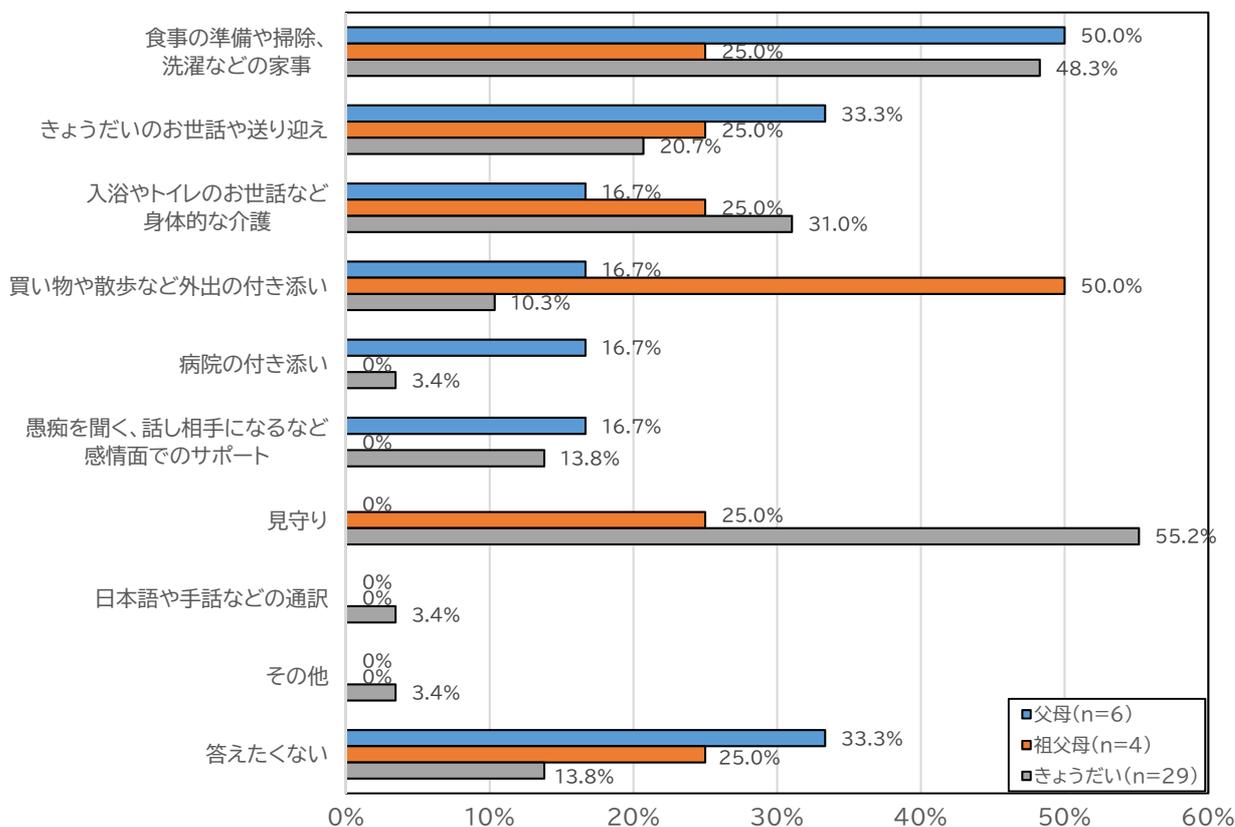


図 14 中学生がするお世話の内容

(3) 16歳～18歳がするお世話

お世話の相手として「祖父母」と回答した人は、「入浴やトイレのお世話など身体的な介護」及び「その他」と回答している。「きょうだい」と回答した人は、「入浴やトイレのお世話など身体的な介護」及び「見守り」と回答している。

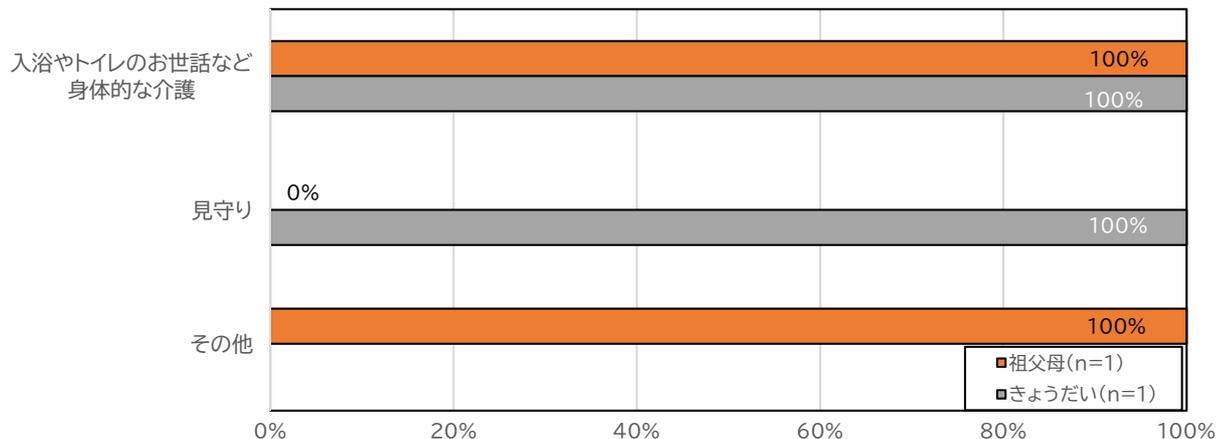


図 15 16歳～18歳がするお世話の内容

5 一緒にお世話をしている人

小学生、中学生ともに、お世話をする相手によらず、一緒にお世話をしている人として、「母」、「父」及び「きょうだい」の割合が高く、家族内でお世話をする人が多い状況にある。

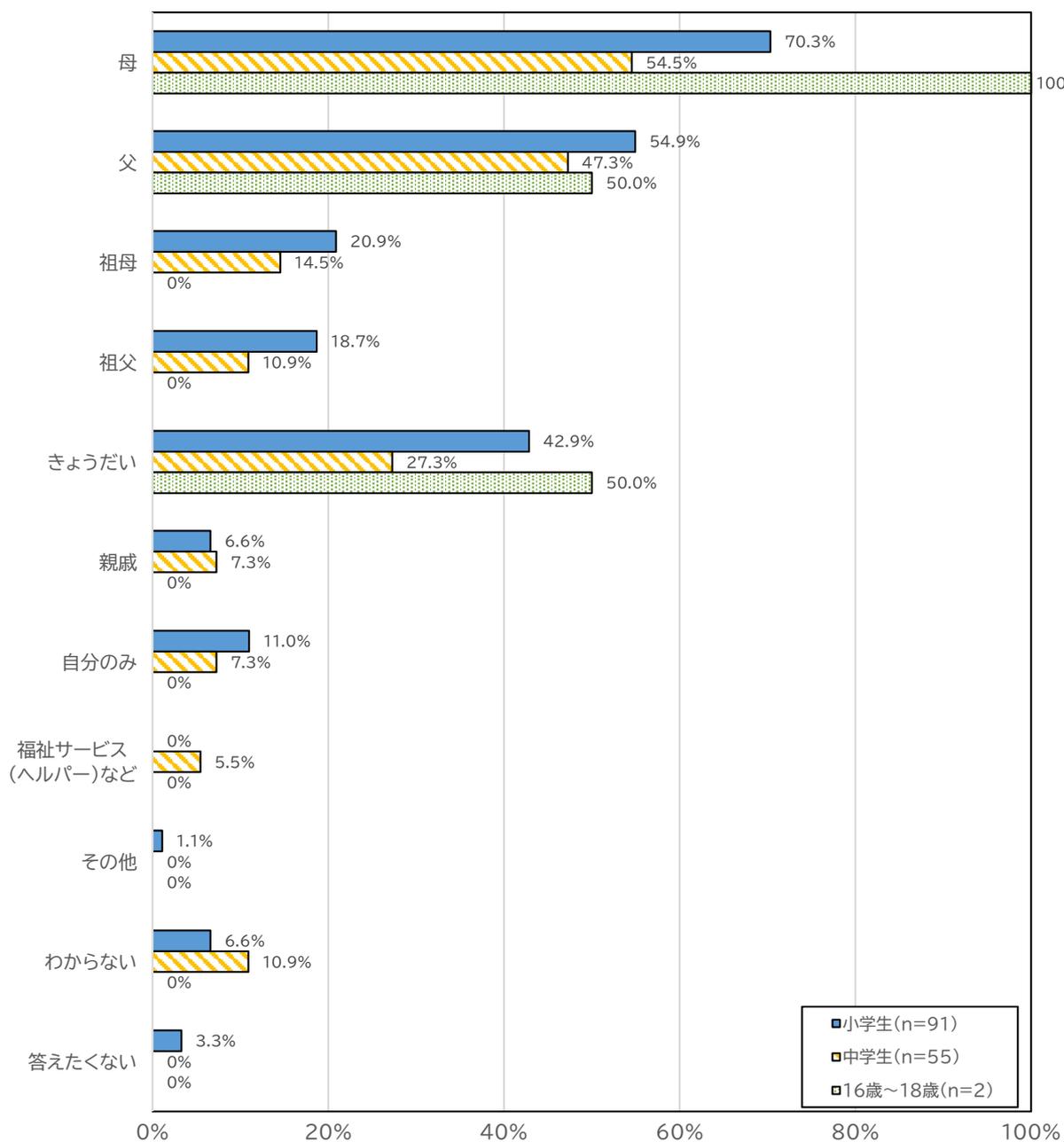


図 16 お世話を一緒にする人

6 お世話の頻度

小学生及び中学生では、お世話する相手が「父母」の場合は「週に3～5日」、「祖父母」の場合は「週に1～2日」と回答した割合が最も高かった。「兄弟」の場合は、「ほぼ毎日」と回答した割合が4割以上と最も高かった。

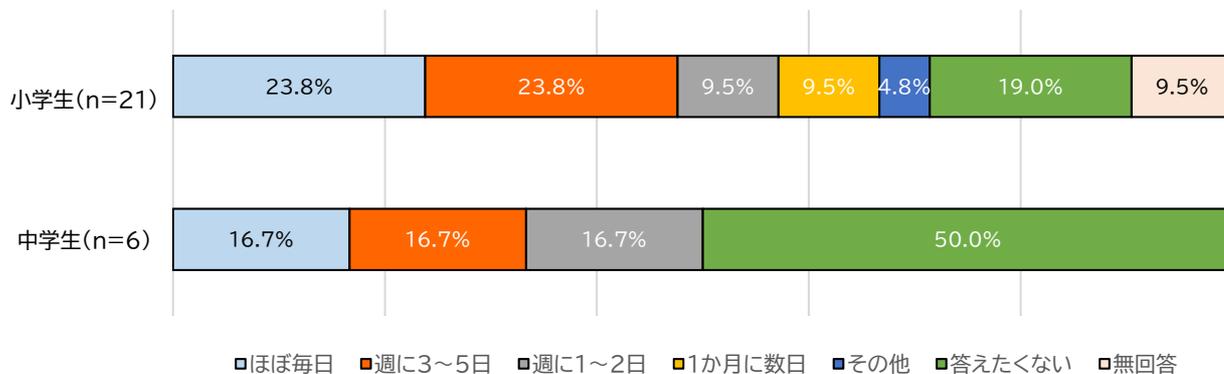


図 17 「父母」をお世話する頻度

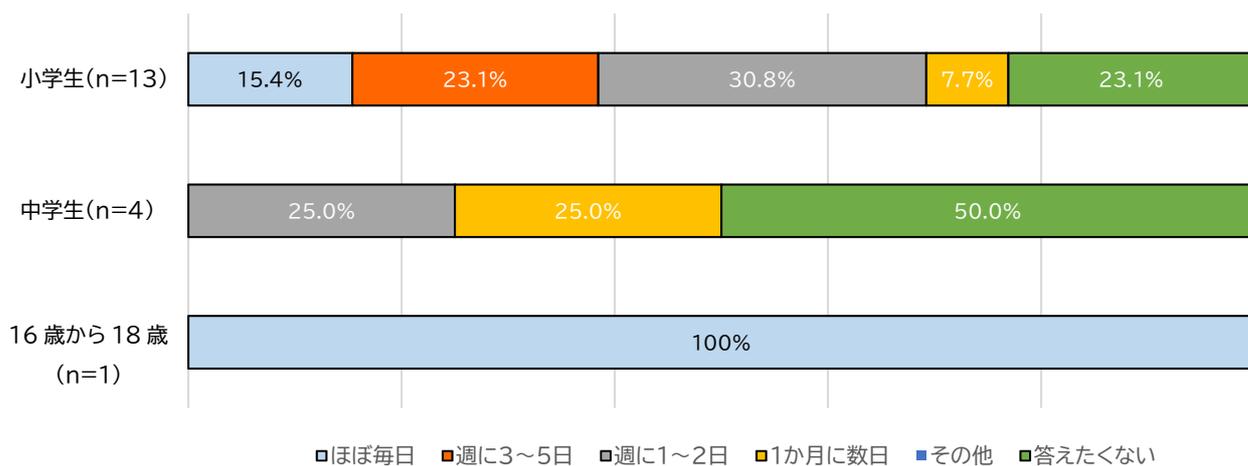


図 18 「祖父母」をお世話する頻度

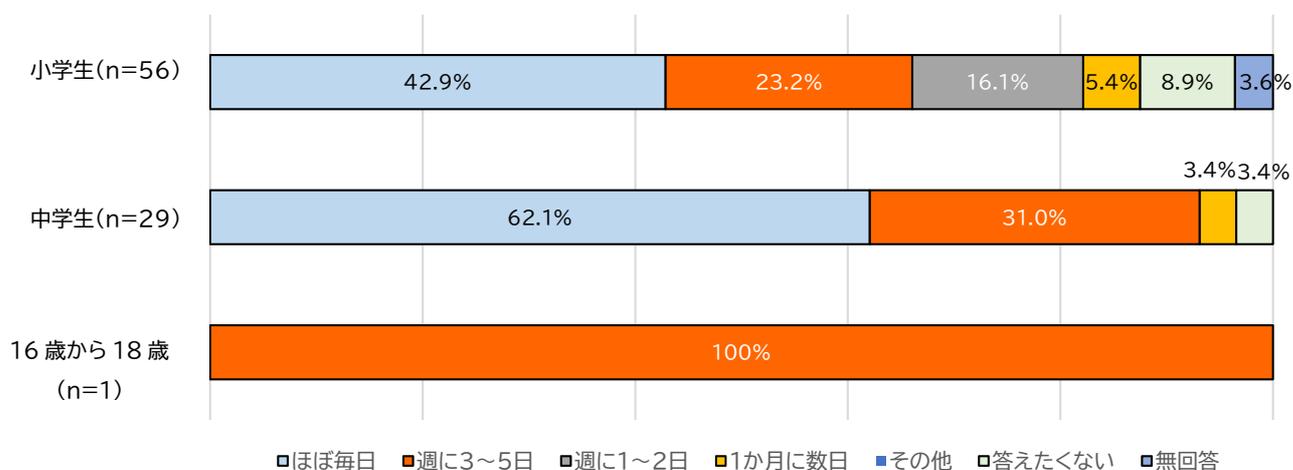


図 19 「きょうだい」をお世話する頻度

7 お世話に費やす時間

(1) 平日

平日にお世話に費やす時間は、お世話する相手によらず、「3時間未満」と回答した割合が最も高かった。

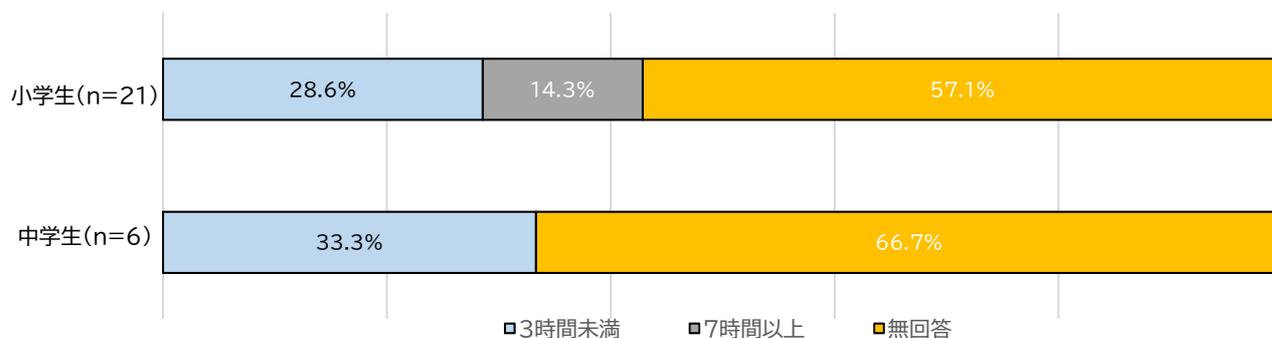


図 20 平日に「父母」をお世話するのに費やす時間

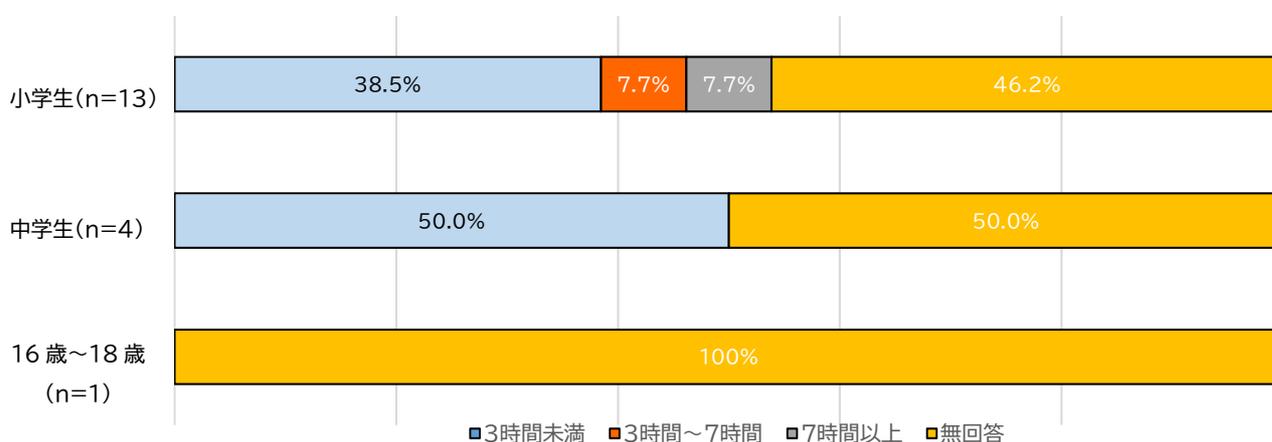


図 21 平日に「祖父母」をお世話するのに費やす時間

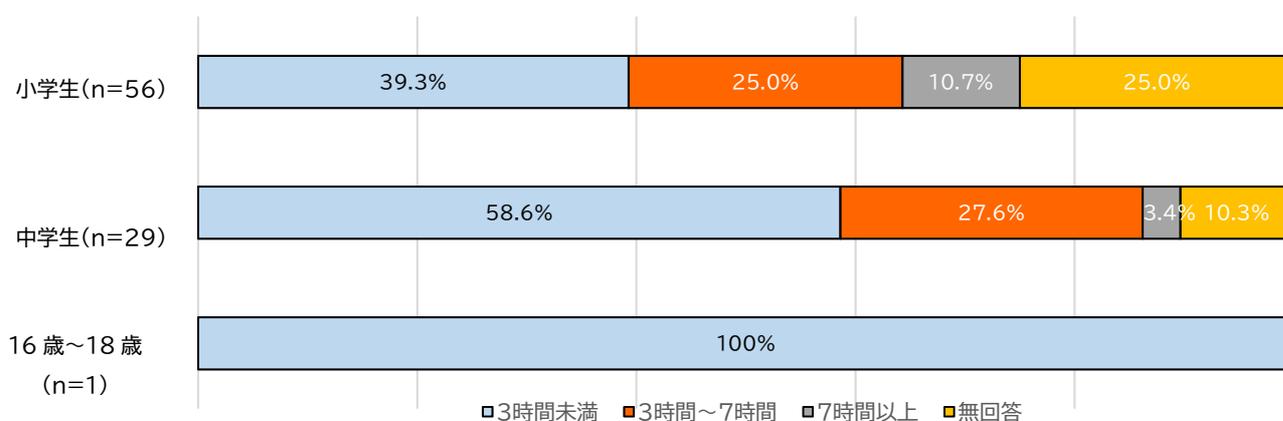


図 22 平日に「きょうだい」をお世話するのに費やす時間

(2) 休日

休日では、平日に比べ「3時間～7時間」または「7時間以上」と回答した割合が増えており、お世話を費やす時間が長くなる状況にあった。

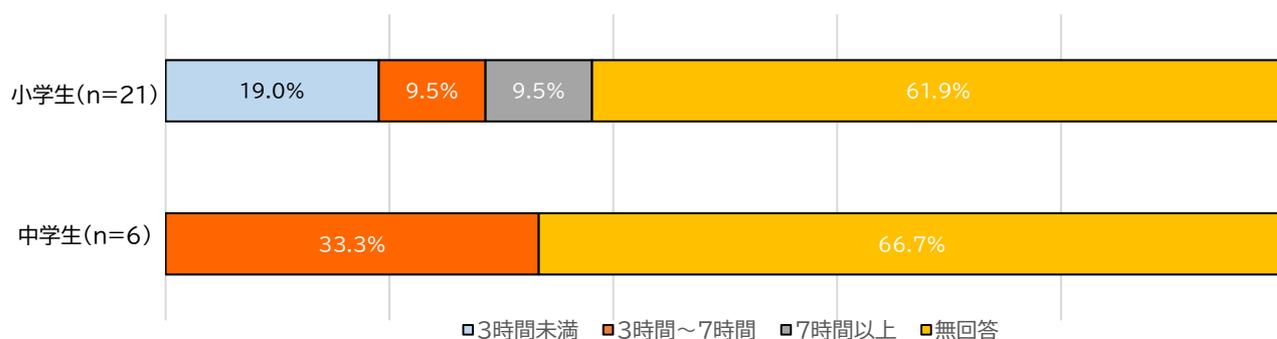


図 23 休日に「父母」をお世話するのに費やす時間

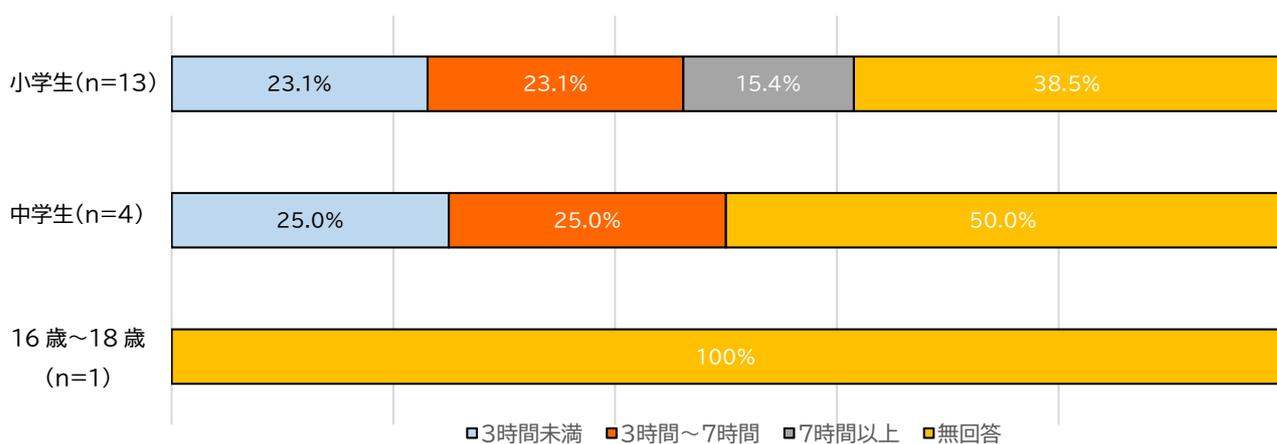


図 24 休日に「祖父母」をお世話するのに費やす時間

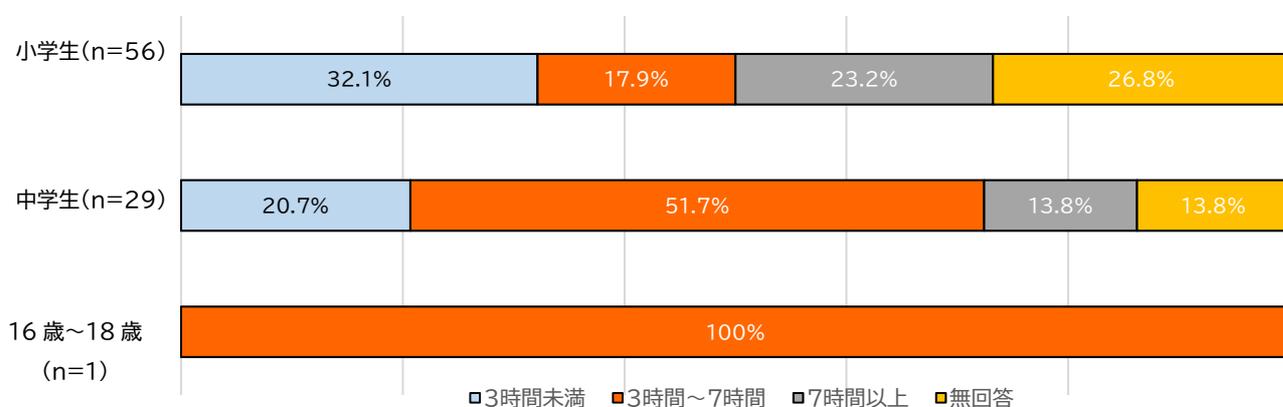


図 25 休日に「きょうだい」をお世話するのに費やす時間

8 健康状態

健康状態について、小学生では、お世話をしている人が「いる」と回答した子どもと「いない」と回答した子どもで大きな差はみられなかったが、中学生では、「いない」と回答した子どもと比べ、「いる」と回答した子どもでは、健康状態が「あまり良くない」または「良くない」と回答した割合が高い状況にあった。

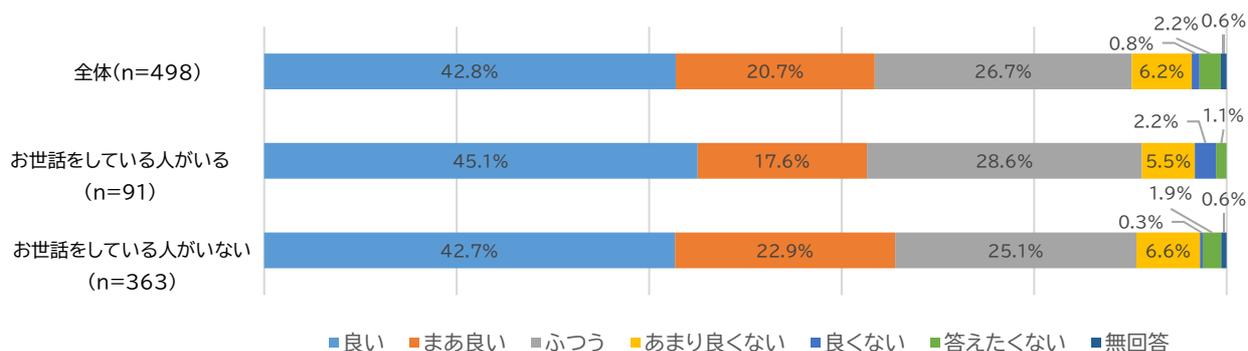


図 26 健康状態(小学生)

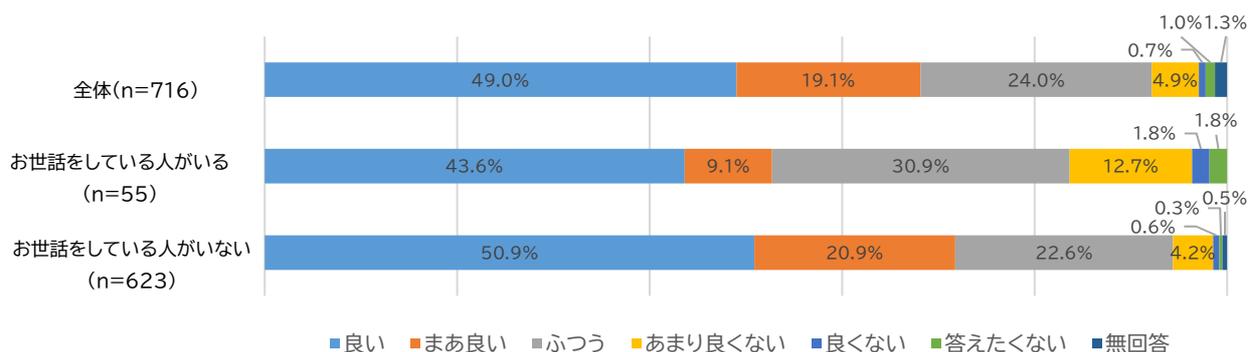


図 27 健康状態(中学生)

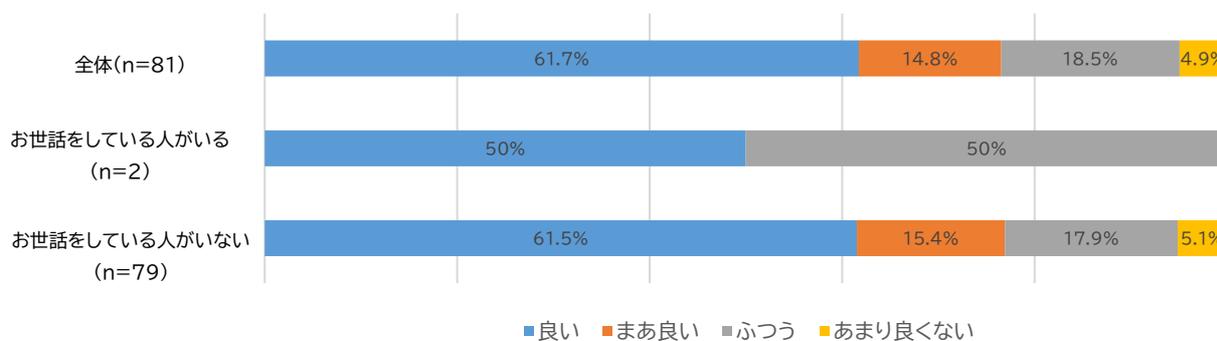


図 28 健康状態(16歳~18歳)

9 学校での生活

学校での生活について、中学生では、お世話をしている人が「いる」と回答した子どもと「いない」と回答した子どもで大きな差はみられなかったが、小学生では、「いない」と回答した子どもと比べ、「いる」と回答した子どもでは、学校での生活が「あまり楽しいとは思わない」または「楽しくない」と回答した割合が高い状況にあった。

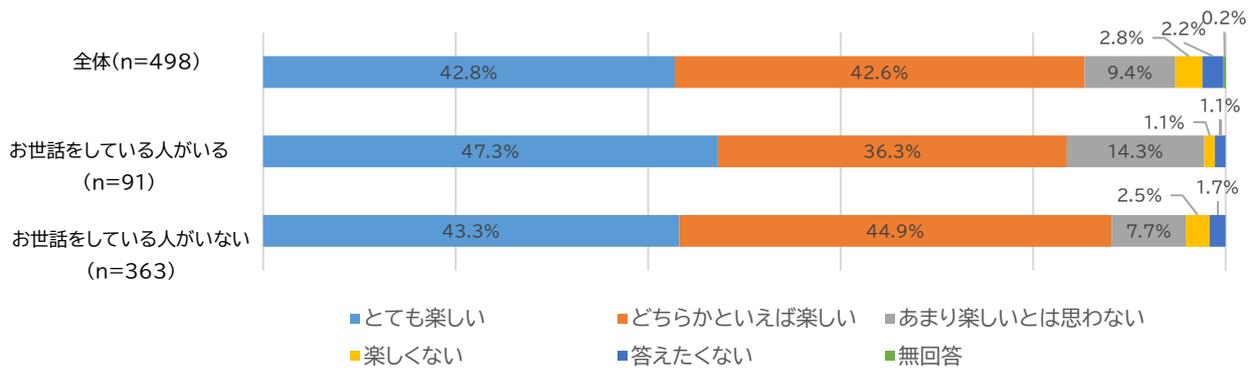


図 29 学校での生活(小学生)

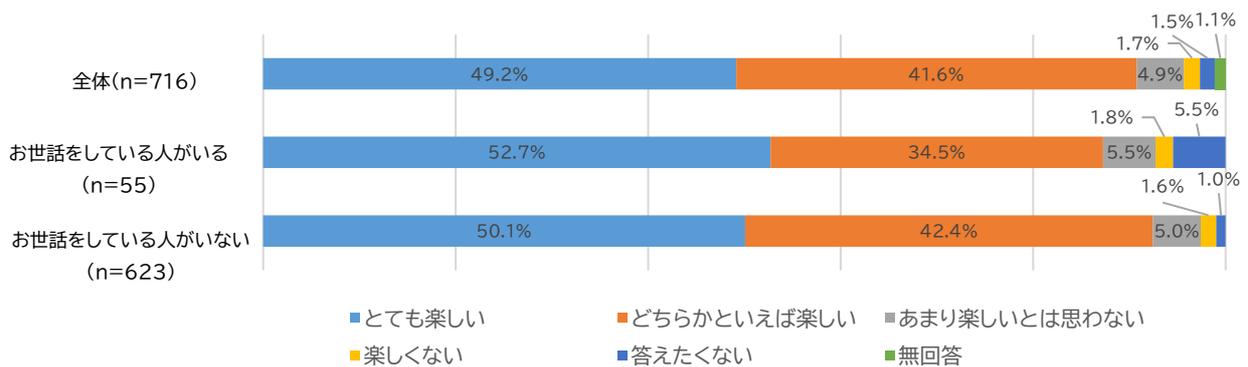


図 30 学校での生活(中学生)

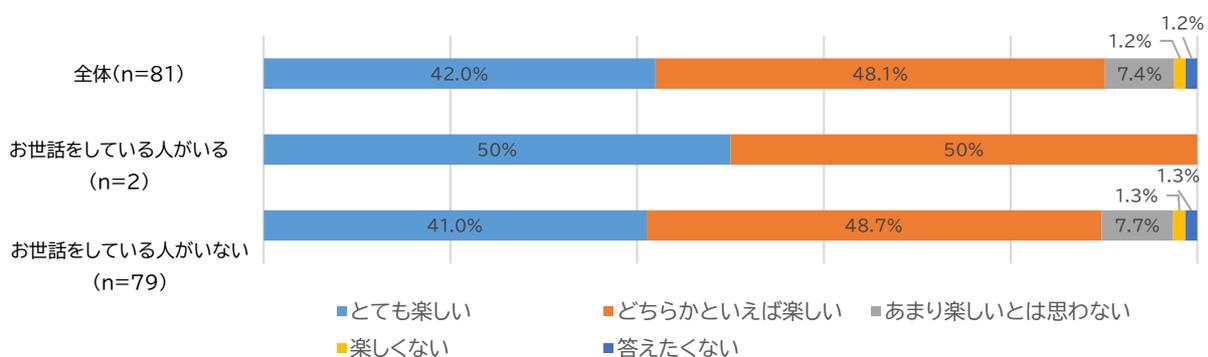


図 31 学校での生活(16歳~18歳)

10 部活動（学校外での活動も含む）への参加

すべての年代において、7割以上が部活動等に参加していると回答している。

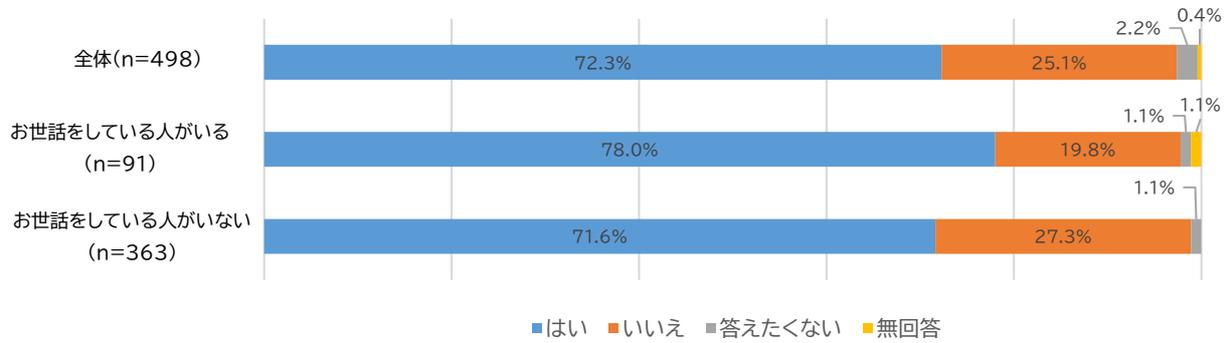


図 32 部活動等への参加状況(小学生)

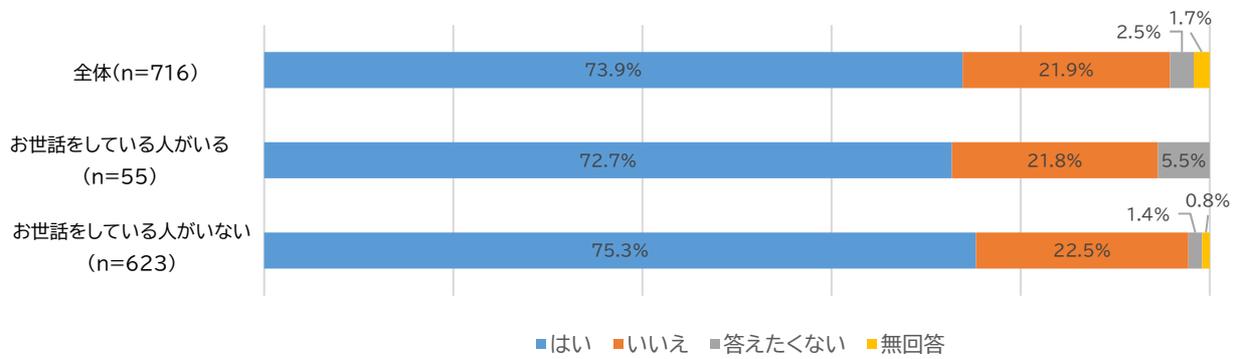


図 33 部活動等への参加状況(中学生)

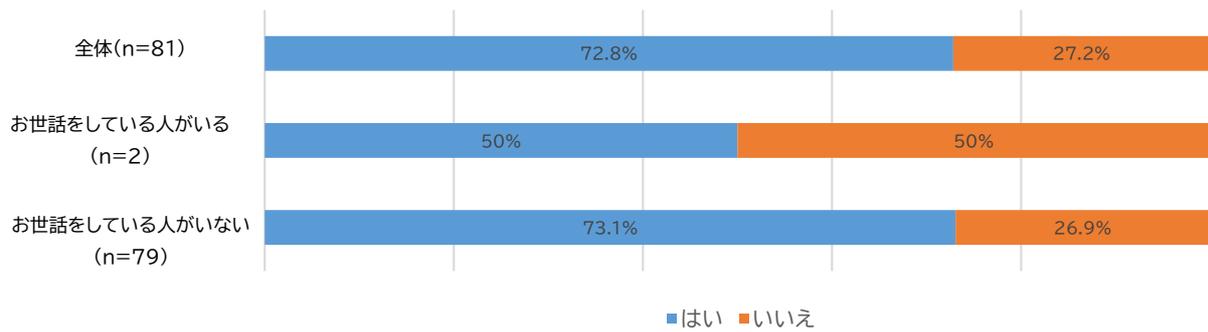


図 34 部活動等への参加状況(16歳~18歳)

11 授業の理解度

学校の授業の理解度について、小学生では、お世話をしている人が「いる」と回答した子どもと「いない」と回答した子どもで大きな差はみられなかったが、中学生では、「いない」と回答した子どもと比べ、「いる」と回答した子どもでは、学校の授業を「あまり理解できていない」または「ほとんど理解できていない」と回答した割合が高い状況にあった。

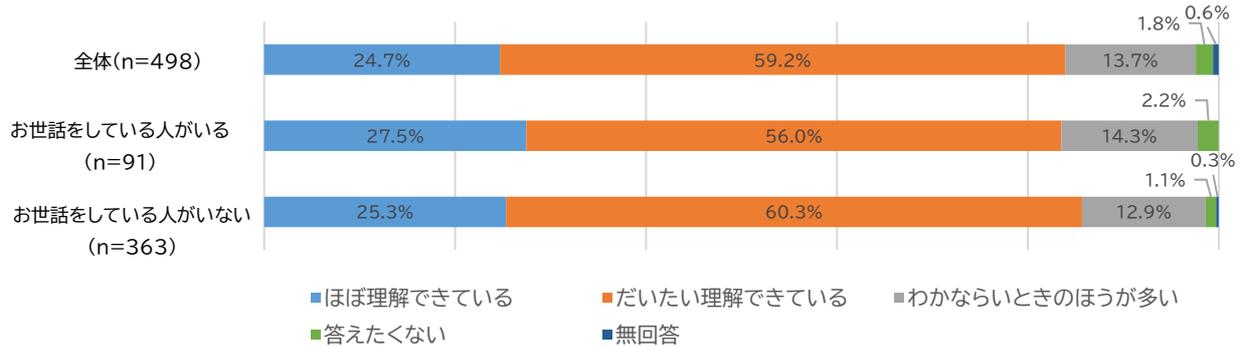


図 35 授業の理解度(小学生)

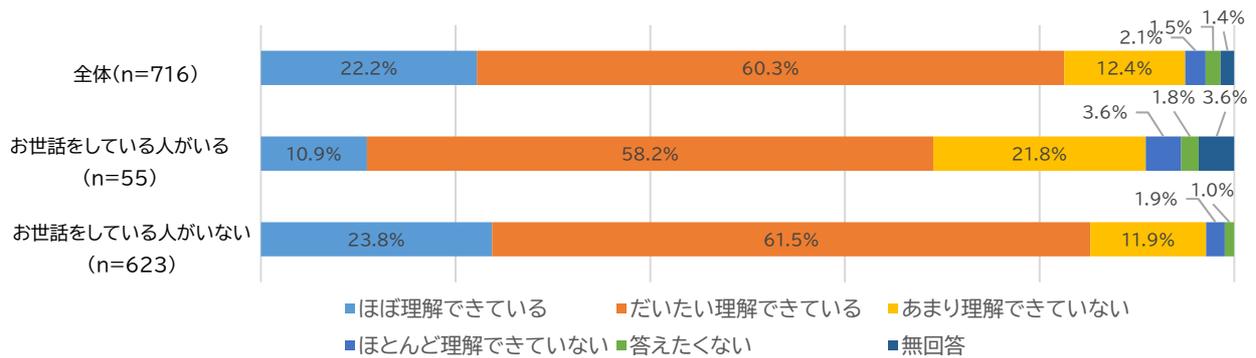


図 36 授業の理解度(中学生)

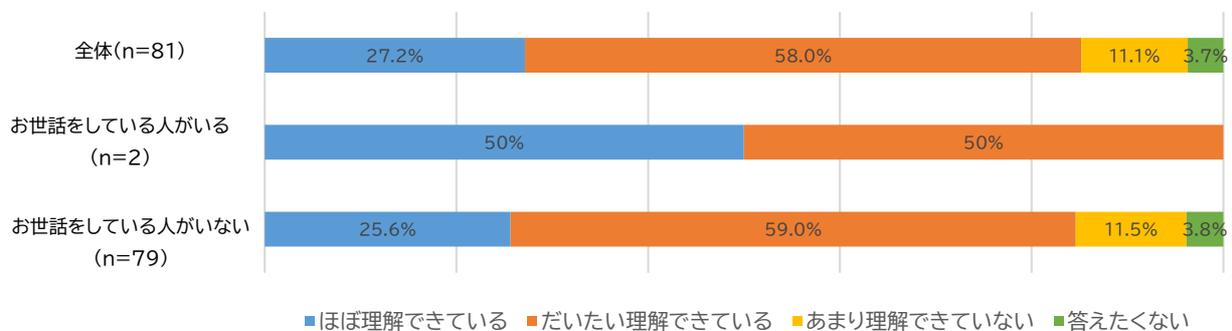


図 37 授業の理解度(16歳~18歳)

12 欠席

小学生及び中学生では、お世話をしている人が「いない」と回答した子どもと比べ、「いる」と回答した子どもでは、学校を「たまに欠席する」と回答した割合が高い状況にあった。

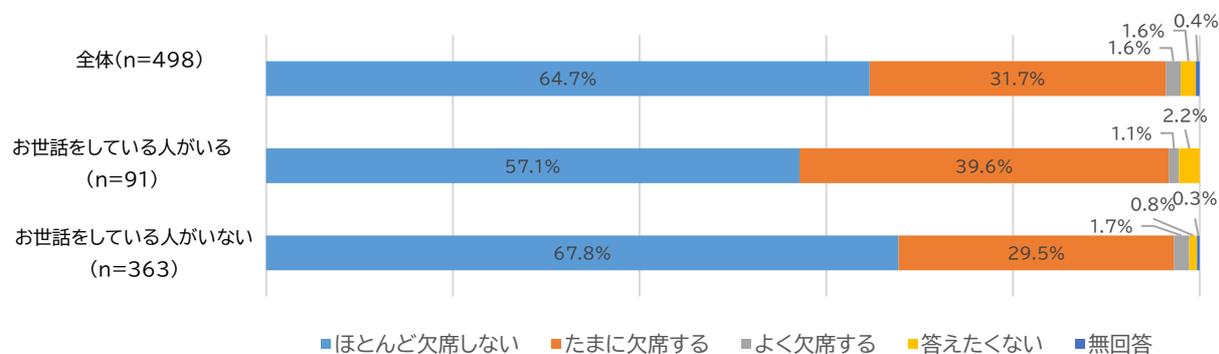


図 38 欠席状況(小学生)

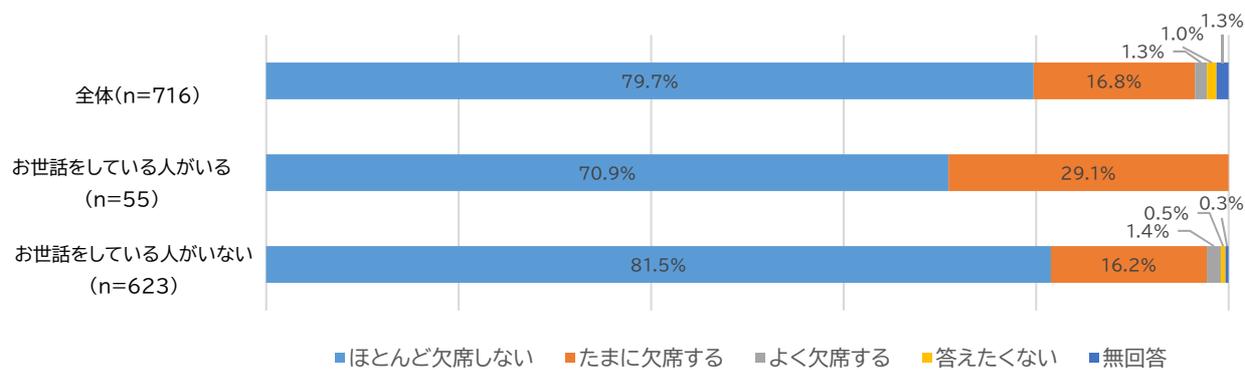


図 39 欠席状況(中学生)

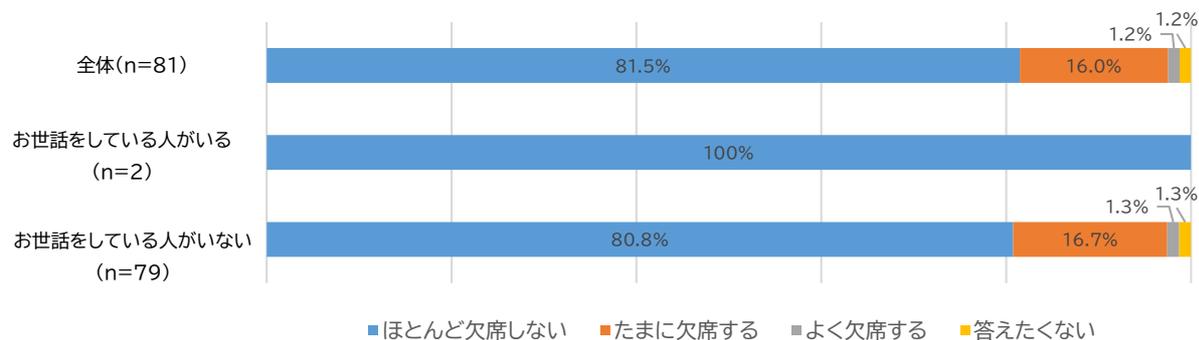


図 40 欠席状況(16歳～18歳)

13 遅刻・早退

小学生及び中学生では、お世話をしている人が「いない」と回答した子どもと比べ、「いる」と回答した子どもでは、学校を早退するまたは遅刻することについて、「たまにする」または「よくする」と回答した割合が高い状況にあった。

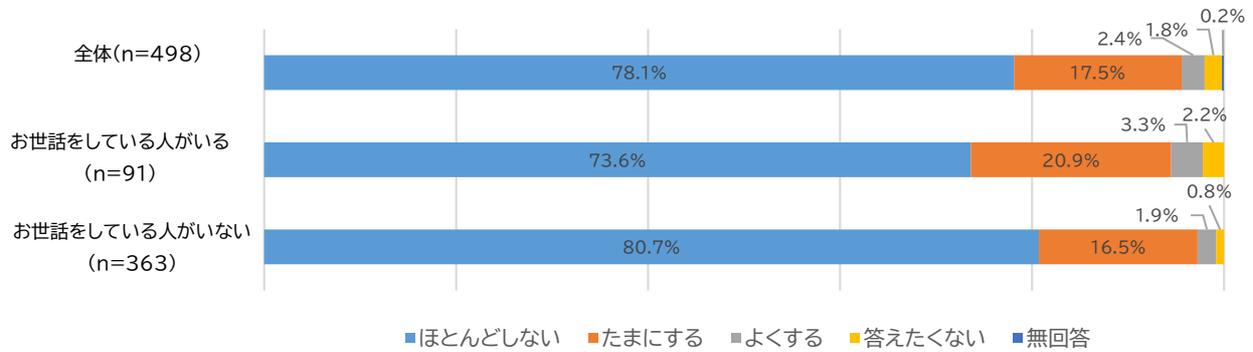


図 41 遅刻・早退の状況(小学生)

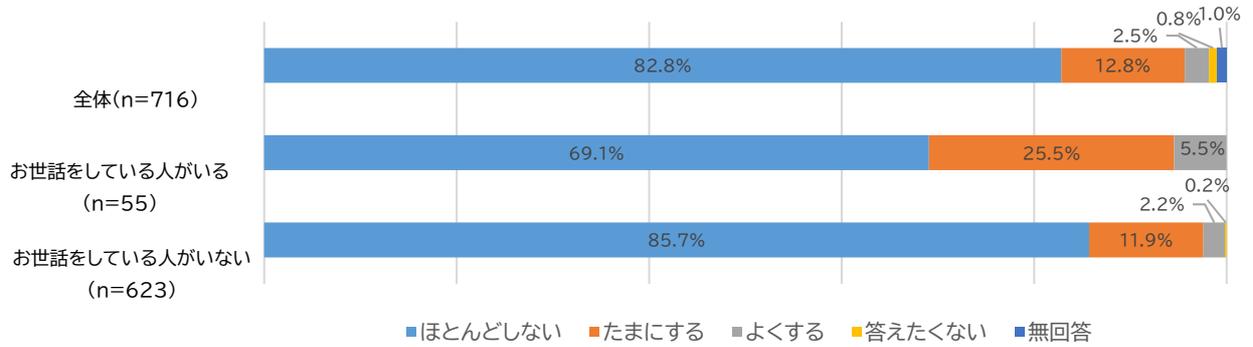


図 42 遅刻・早退の状況(中学生)

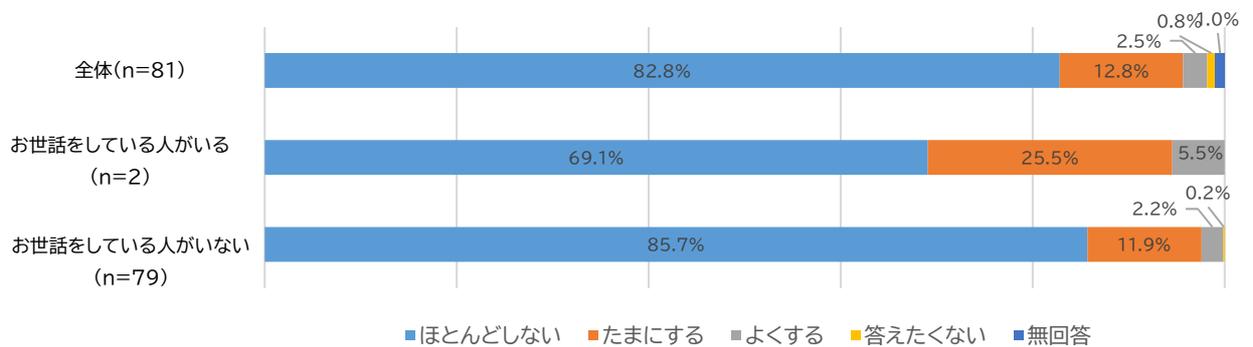


図 43 遅刻・早退の状況(16歳～18歳)

14 普段の学校生活

小学生及び中学生では、お世話をしている人が「いない」と回答した子どもと比べ、「いる」と回答した子どもでは、普段の学校生活において「授業中に居眠りをする事が多い」、「宿題や課題ができていないことが多い」、「持ち物の忘れ物が多い」、「部活動や習い事を休むことが多い」、「提出物の提出が遅れることが多い」、「学校では一人で過ごすことが多い」と回答する割合が高い状況にあった。また、「いる」と回答した児童及び生徒の4割以上が「持ち物の忘れ物が多い」と回答している。

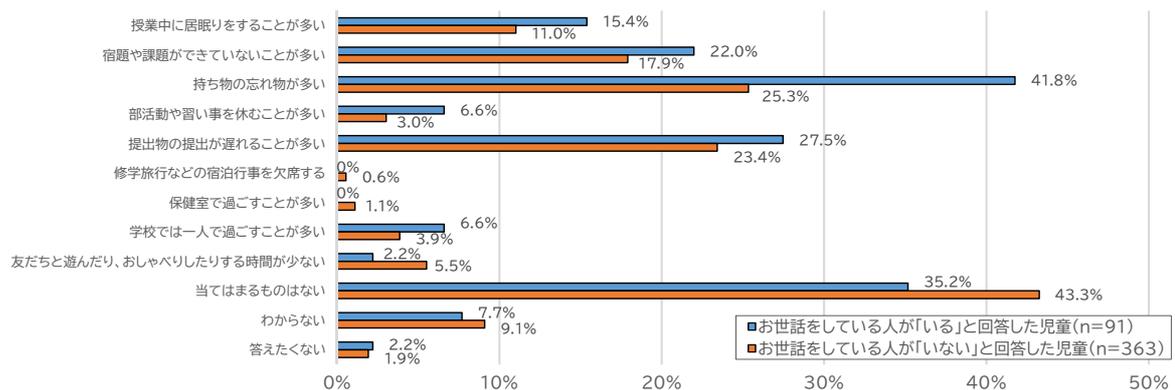


図 44 普段の学校生活(小学生)

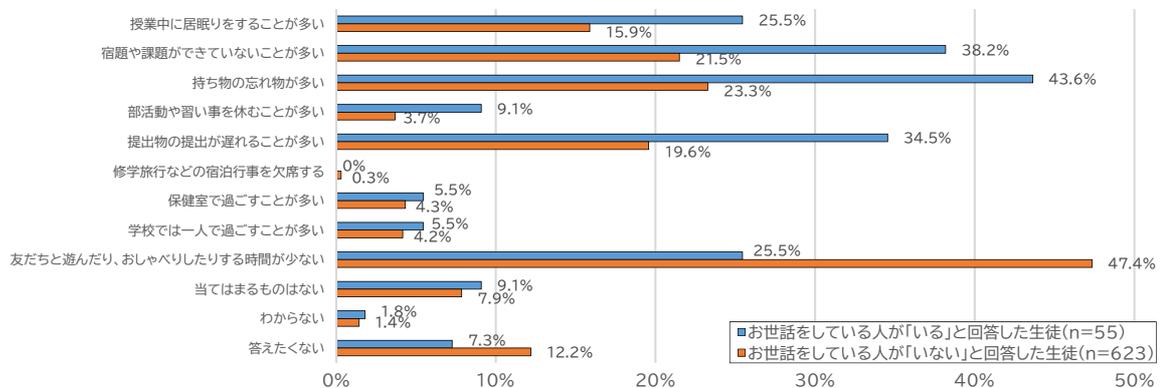


図 45 普段の学校生活(中学生)

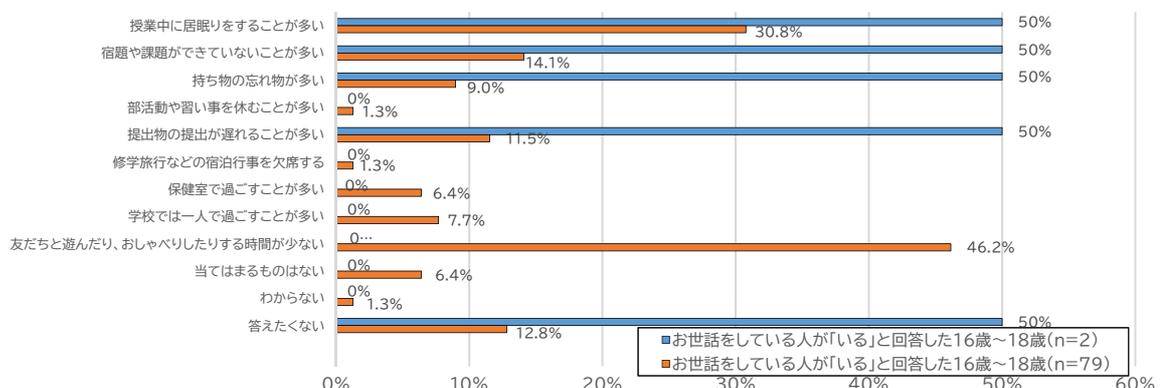


図 46 普段の学校生活(16歳~18歳)

15 悩みごと

小学生では、お世話をしている人が「いる」と回答した児童と「いない」と回答した児童で悩みごとに大きな差はみられなかったが、中学生では「いる」と回答した生徒は、「いない」と回答した生徒に比べ、学校生活に関すること及び家族・家庭環境に関することで悩んでいると回答した割合が高い状況であった。

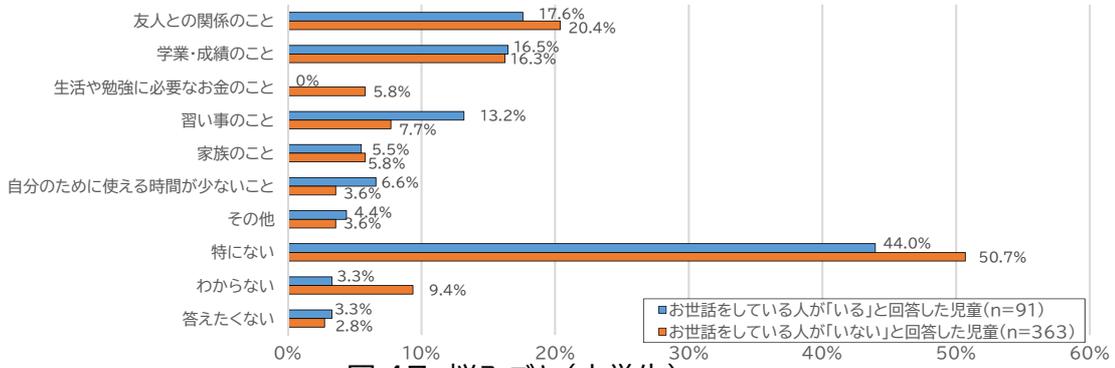


図 47 悩みごと(小学生)

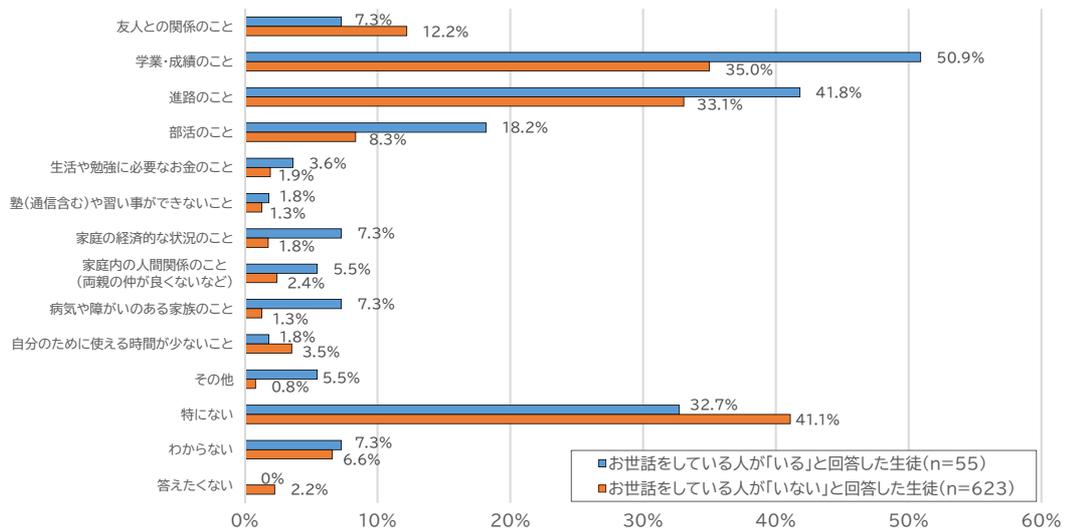


図 48 悩みごと(中学生)

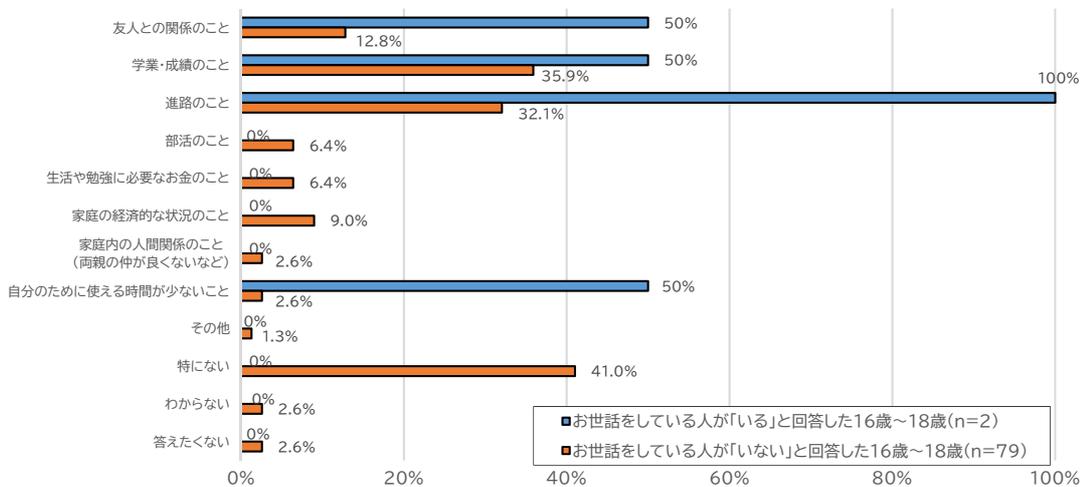


図 49 悩みごと(16歳~18歳)

16 お世話をしていることでできないこと

お世話をしていることでできないこととして、「わからない」を除くと、小学生では「自分の時間が取れない」、と回答した割合が最も高く、次いで「睡眠が十分に取れない」が、中学生では「睡眠が十分に取れない」と回答した割合が最も高く、次いで「自分の時間が取れない」と回答した割合が高かった。

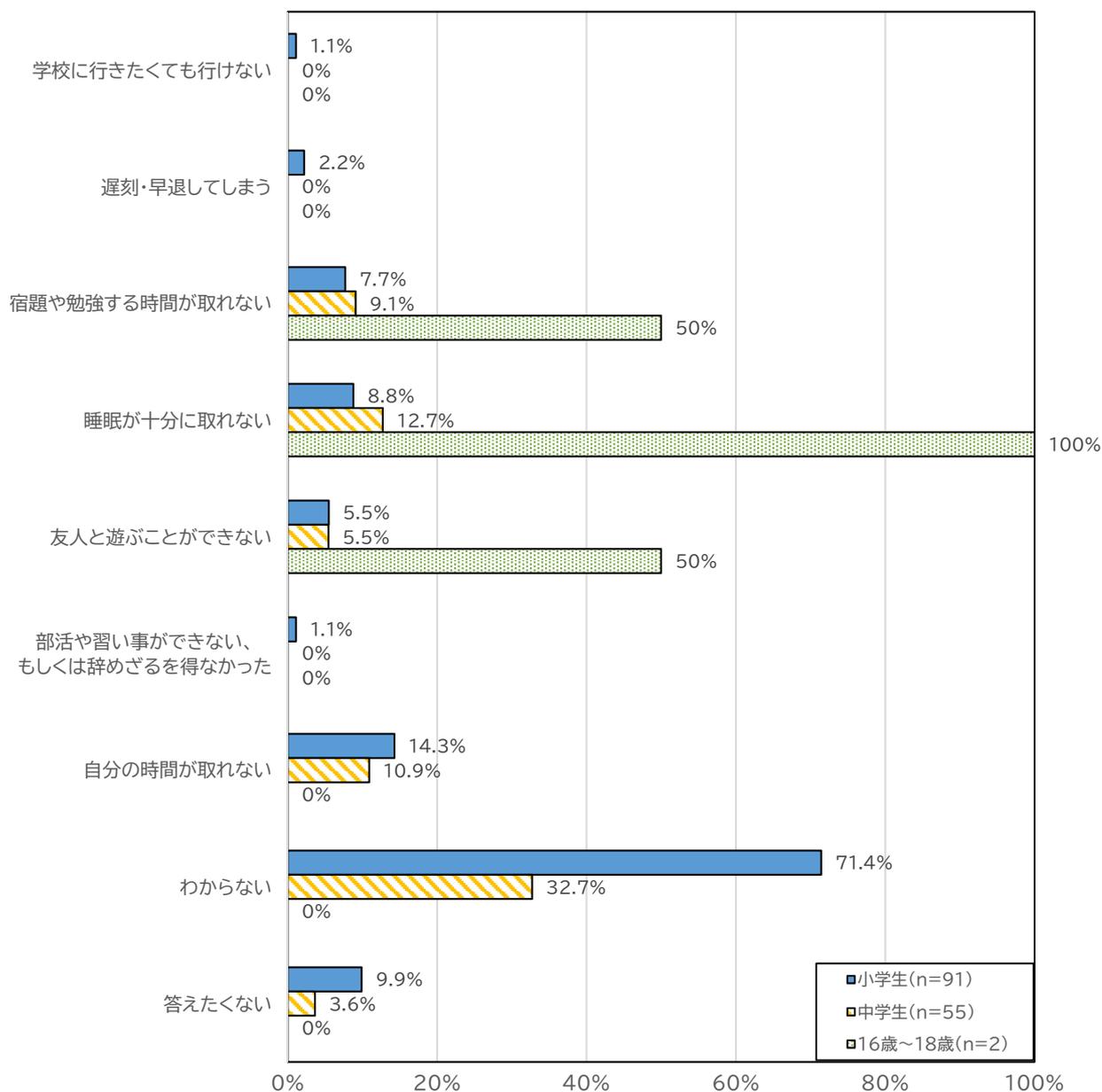


図 50 お世話をしていることでできないこと

17 お世話のきつさ

お世話のきつさについて「特に大変さを感じていない」を除くと、小学生では「体力面で大変」、中学生では「時間の余裕がない」と回答する割合が最も高かった。

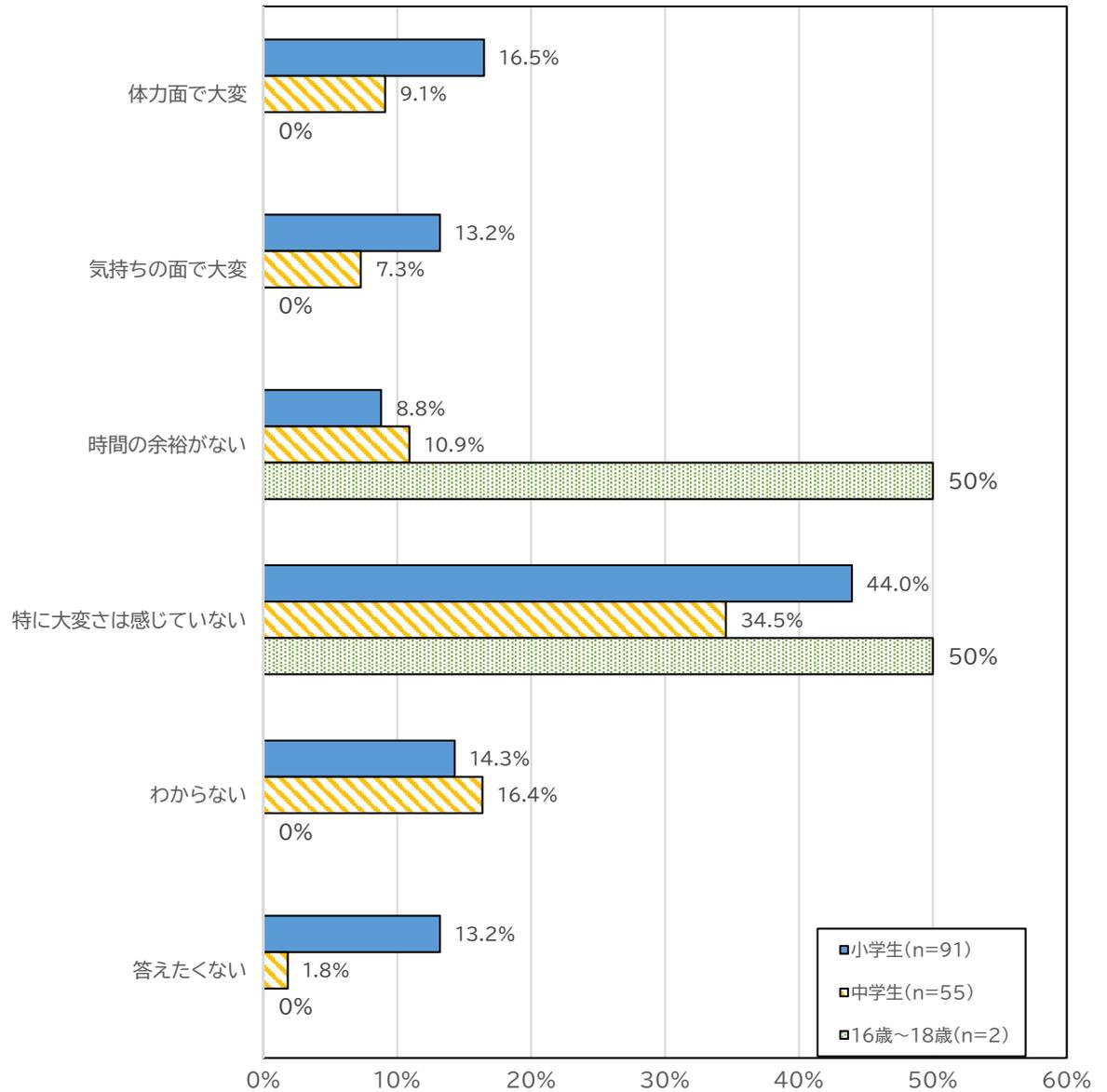


図 51 お世話のきつさ

18 相談状況

お世話について相談したことが「ある」と回答した割合は、小学生で17.6%、中学生で10.9%であり、相談相手は、小学生、中学生ともに「家族」が6割以上であった。相談したことが「ない」と回答した割合は、全体の5割以上で、相談しない理由としては、「誰かに相談するほどの悩みではないから」と回答した割合が最も高かった。

(1) 小学生 (n=91)

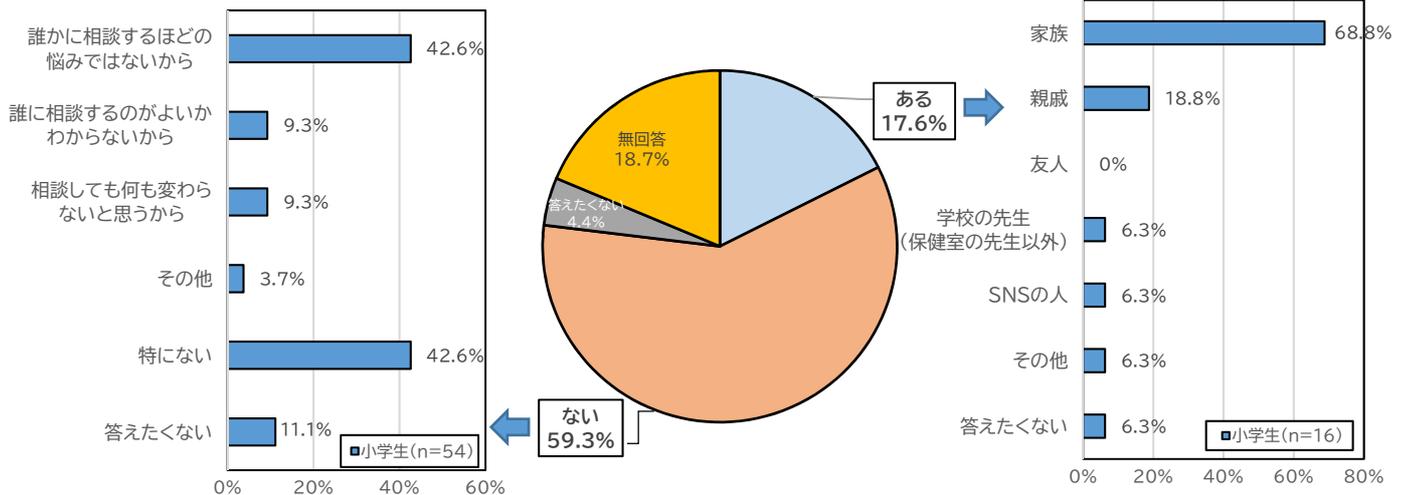


図 52 相談状況(小学生)

(2) 中学生 (n=55)

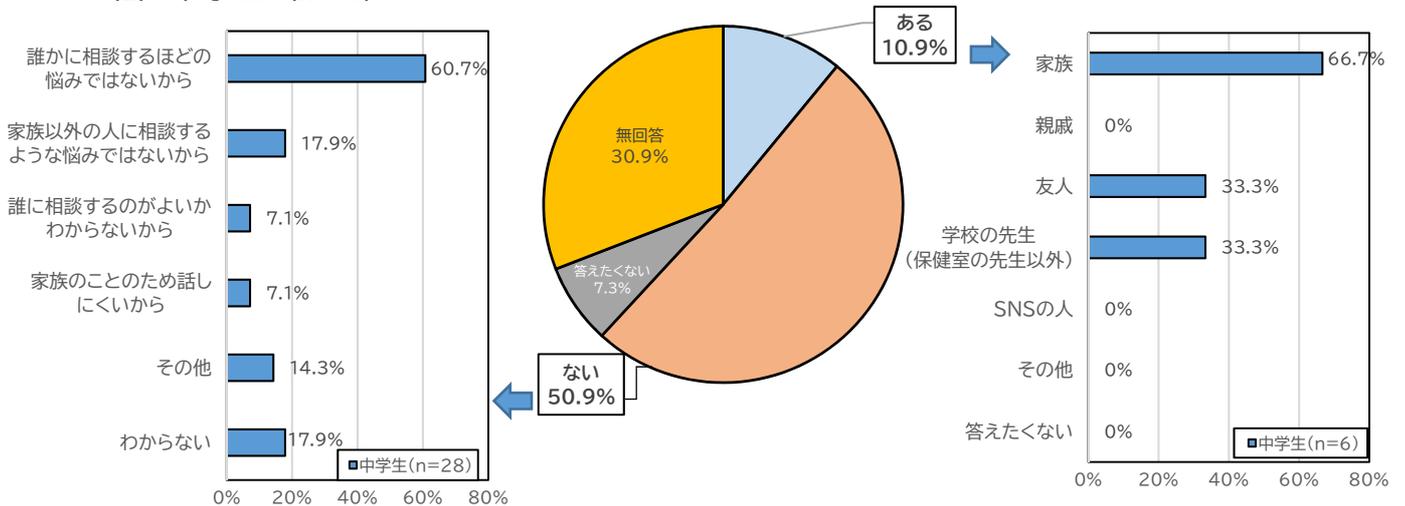


図 53 相談状況(中学生)

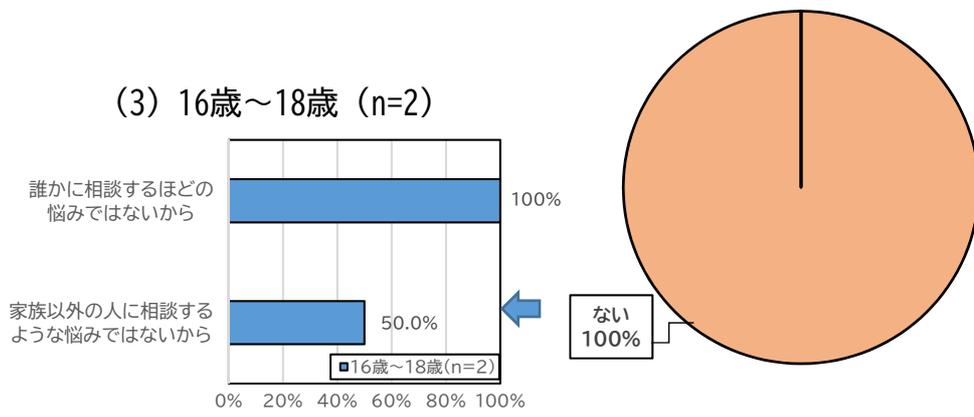


図 53 相談状況(16 歳～18 歳)

19 お世話の悩みを聞いてくれる人

お世話について相談したことが「ない」と回答した子どもで、お世話の悩みを聞いてくれる人が「いる」と回答した割合は、すべての年代で4割から5割程度であった。

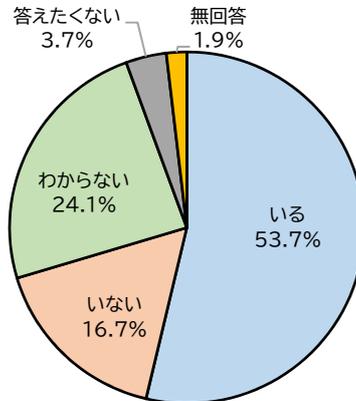


図 54 お世話の悩みを聞いてくれる人(小学生 n=54)

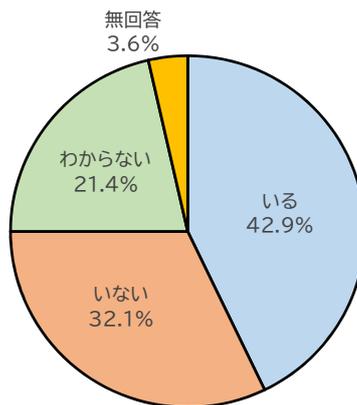


図 55 お世話の悩みを聞いてくれる人(中学生 n=28)

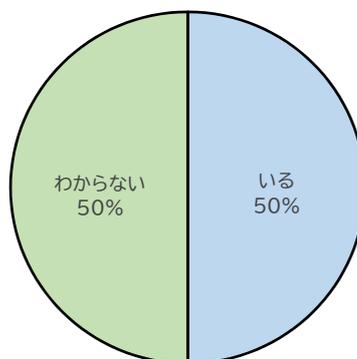


図 56 お世話の悩みを聞いてくれる人(16歳~18歳 n=2)

20 学校や周りの大人に助けてほしいこと

学校や周りの大人に助けてほしいこととして、「特にない」を除くと、小学生及び中学生では「学校の勉強や受験勉強などの学習のサポート」と回答した割合が最も高かった。

「自分のことについて話を聞いてほしい」、「家族のお世話について相談にのってほしい」と回答した子どもが希望する相談方法としては、小学生では「直接会って」と回答した割合が最も高く、中学生では「直接会って」及び「メール」が同率であった。

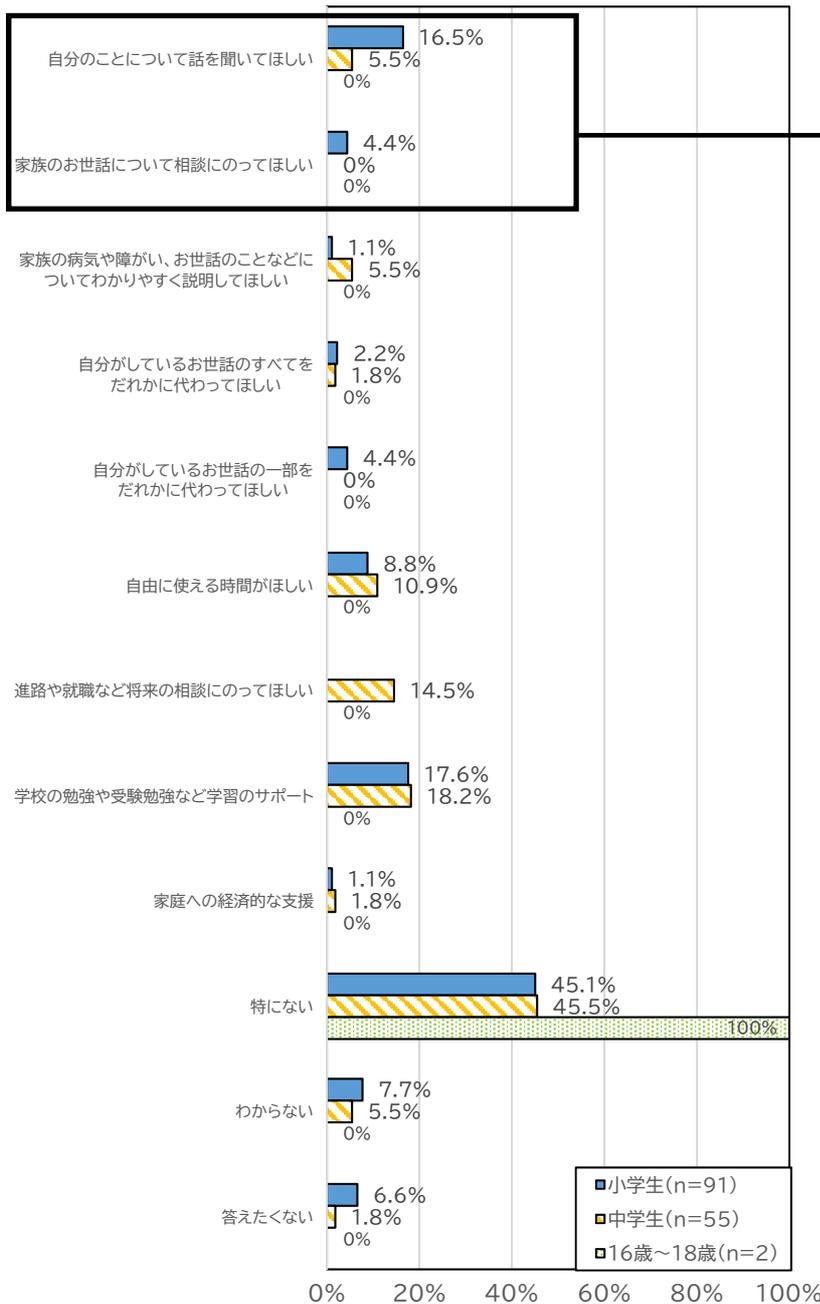


図 57 学校や周りの大人に助けてほしいこと

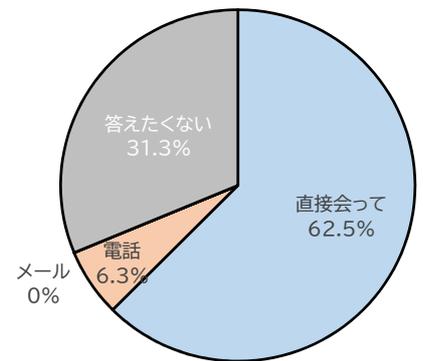


図 58 相談方法(n=16)

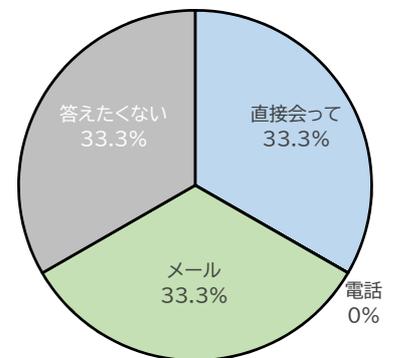


図 59 相談方法(n=3)

21 オンラインでの交流場について

家族のお世話に関して、過去に悩みを抱えていた大人から話を聞いたり、同年代の同じ悩みを抱える生徒と話し合ったりするオンラインでの交流場に「参加してみたい」と回答した割合は、中学生では0.4%、16歳～18歳ではいなかった。

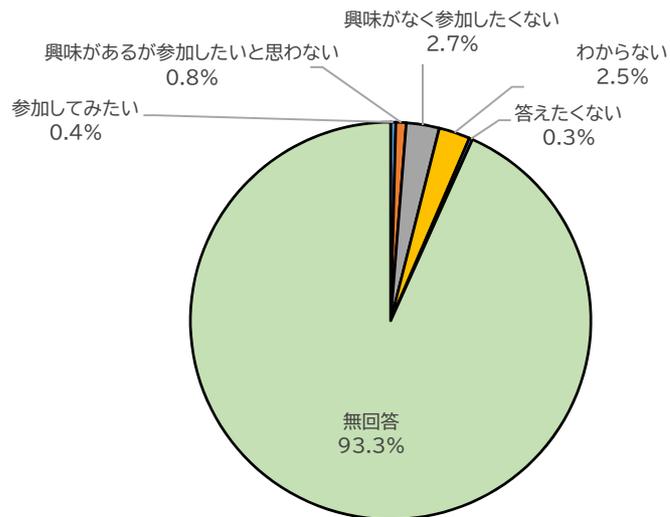


図 60 オンラインの交流場について (中学生 n=716)

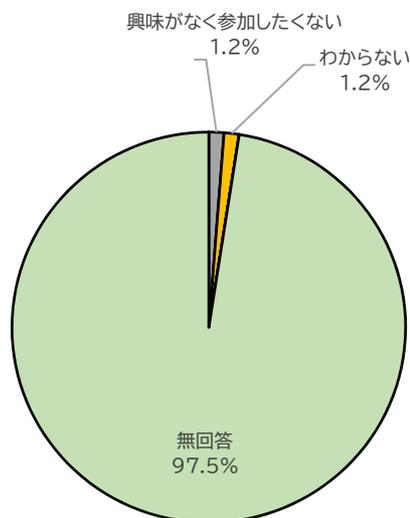


図 61 オンラインの交流場について (16歳～18歳 n=81)

22 ヤングケアラーの認知度

「ヤングケアラー」という言葉について「聞いたことがあり、内容も知っている」と回答した割合は、中学生で13.4%、16歳～18歳では69.1%で、「聞いたことはあるが、よく知らない」と回答した割合は、中学生で20.5%、16歳～18歳では22.2%と、中学生では約3割が、16歳～18歳では約9割がヤングケアラーという言葉を知っていた。

「ヤングケアラー」という言葉を知った媒体としては、中学生では「テレビや新聞、ラジオ」と回答した割合が50.2%と最も高く、16歳～18歳では「学校」が77.0%と最も高かった。

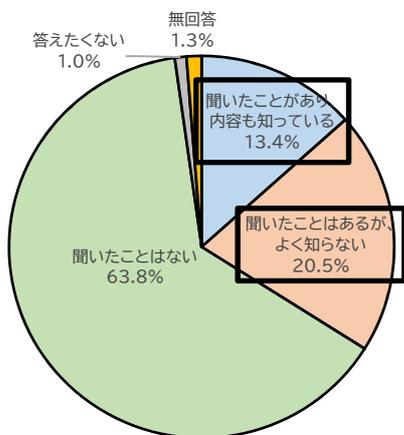


図 62 ヤングケアラーの認知度 (中学生 n=716)

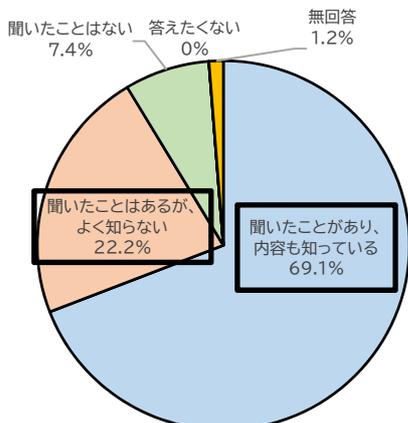


図 63 ヤングケアラーの認知度 (16歳～18歳 n=81)

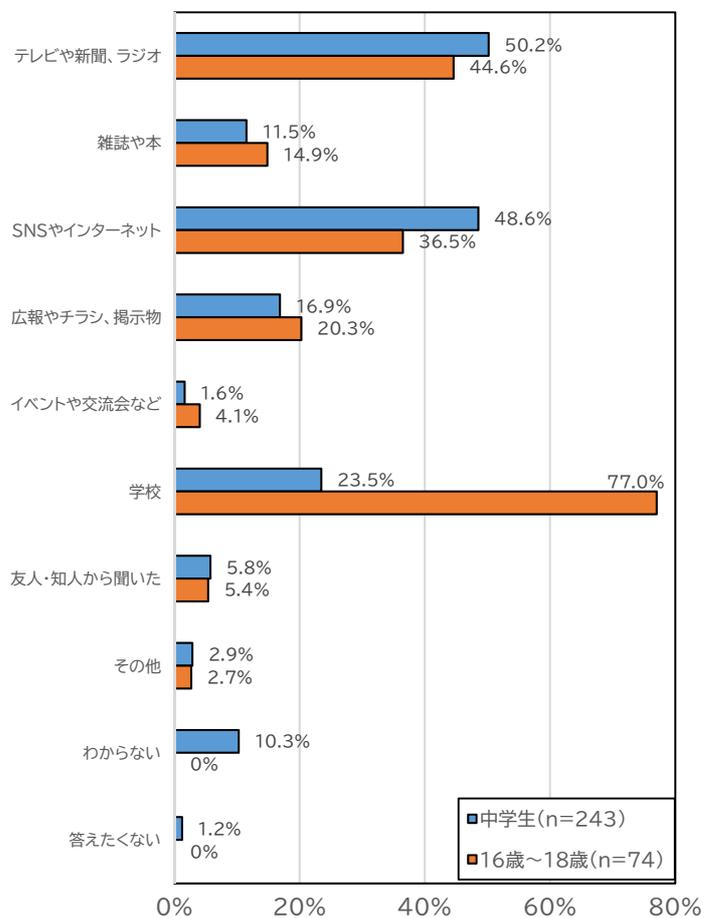


図 64 ヤングケアラーという言葉を知った媒体

23 ヤングケアラーの自覚

ヤングケアラーに「当てはまる」と回答した割合は、中学生で1.0%、16歳～18歳では2.5%であった。また、「あてはまらない」と回答した割合は、中学生で82.7%、16歳～18歳では86.4%であった。

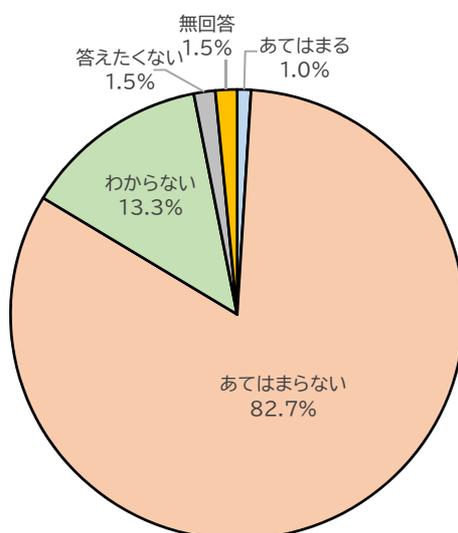


図 65 ヤングケアラーの自覚 (中学生 n=716)

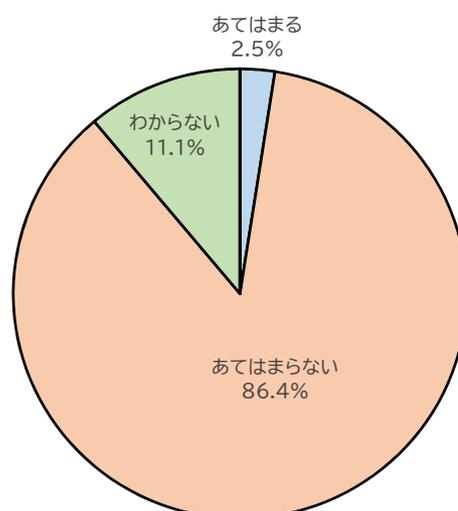


図 66 ヤングケアラーの自覚 (16歳～18歳 n=81)

24 ヤングケアラーへの支援を広めていくために必要だと思うことや要望（原文記載を基本としつつ、一部編集・抜粋の上、掲載）

(1) 小学生

内容	主な意見
経済的支援	<ul style="list-style-type: none"> ○給付金の配布 ○募金活動 ○デイサービス、日用品、食べ物等の提供
行政の支援	<ul style="list-style-type: none"> ○家事を無料でやってくれるサービス、ベビーシッターを低価格で提供する ○悩みを聞いてくれる人か窓口 ○無料の介護施設をつくるなどの社会福祉に重視してほしい ○先生が家の様子を見る
家事等のサポート	<ul style="list-style-type: none"> ○一人だけでなく、何人かで世話をして一人ひとりの負担を減らす ○世話をするのは、大変なのでお家の人と一緒にやったほうがいいと思う
休養・自分の時間の確保	<ul style="list-style-type: none"> ○心を休ませる時間が必要であると思う ○自由時間、家族との時間、宿題をする時間の確保
相談・寄り添い・周囲の理解	<ul style="list-style-type: none"> ○つらいこととかがあったら、相談できそうな人などに相談することが必要だと思います ○家族が動けないって知ってほしい、みんなに理解してほしい ○時々お世話している人のことについて聞いてほしい
制度・施設・環境等の整備	<ul style="list-style-type: none"> ○その家族は施設に入って子どもたちの負担にならないように大人の人と一緒に生活をできるような環境を作る ○介護をしている人たちに対して、学校を休んでもいいような制度を作って、その生徒たちをサポートする
共助	<ul style="list-style-type: none"> ○しっかりと周りを見て、助けを求めている人のことを助ける ○大変そうなことは、周りの人が手伝うことが大切だと思う
啓発・広報	<ul style="list-style-type: none"> ○ヤングケアラーのことを知ってもらう ○必要な教育をしないといけないとおもう
その他	<ul style="list-style-type: none"> ○障害のあること話たりすることが少し難しいので話を聞いてあげたりするのを変わってほしい ○周りの人になにかやっても何も変わらないと思うから何も必要ない

(2) 中学生

内容	主な意見
経済的支援	<ul style="list-style-type: none"> ○給付金の配布 ○募金活動 ○ヤングケアラーの家庭に毎月支援金やお手伝いさんを派遣したらいいと思う
行政の支援	<ul style="list-style-type: none"> ○体験教室みたいなものをつくって、大変さを理解してもらう ○ファミリー・サポート・センターなどのヤングケアラーのサポートセンターが必要だと思う ○相談できる窓口や、人がいる場所があると思う
家事等のサポート	<ul style="list-style-type: none"> ○家族の世話をしてくれるヘルパーを雇う ○積極的に家族のお手伝いをする
休養・自分の時間の確保	<ul style="list-style-type: none"> ○ヤングケアラーが休憩できる場所や少しでも楽になるための援助や道具などを渡す、作るなどする ○ヤングケアラーの人は自分のひとり時間がないのでひとり時間を作ってあげて息抜きなどをさせてあげたい
相談・寄り添い・周囲の理解	<ul style="list-style-type: none"> ○一人で抱え込まず、周りに相談したりする ○もっと障害の人に対する理解をしてほしい ○皆の家庭環境を知る ○相談しあえる信頼関係を築いていくこと
制度・施設・環境等の整備	<ul style="list-style-type: none"> ○保護施設をたくさん作る ○自治体や国などで支援のための制度を確立する。 ○家事や仕事をお手伝いする人をそれぞれの家庭に派遣する制度は必要だと思う
共助	<ul style="list-style-type: none"> ○ヤングケアラーについて頼れるまちづくり(近所との関係を強める) ○家族以外の人が家事などの手助けをする仕事が必要だと思う
啓発・広報	<ul style="list-style-type: none"> ○学校の授業で教える ○情報発信(テレビ、新聞、ラジオ、SNS、ポスター、Wedなど) ○講演会
その他	<ul style="list-style-type: none"> ○家庭状況について調べる機会を設ける ○いいことだけどやっぱり子供じゃなくて大人がすればいいと思う(障害がなかったら) ○民法第877条第1項を変えたほうがいいと思います

(3) 16歳～18歳

内容	主な意見
経済的支援	<ul style="list-style-type: none"> ○支援金 ○食品を持ってきてくれるとか、支援やタクシー移動などの補助があればいいのかなと思いました
行政の支援	<ul style="list-style-type: none"> ○学校などの支援 ○社会福祉の更なる充実 ○具体的な支援制度の充実
家事等のサポート	<ul style="list-style-type: none"> ○兄弟のお世話は必要だと思います
相談・寄り添い・周囲の理解	<ul style="list-style-type: none"> ○普通の会話で「大変だね」みたいなことを言われたり空気を感じると、「自分は大変なのか？」と思い、ネガティブな気持ちになりストレスになったりしてしまうので、状況によっては、寄り添ってあげたほうがいい場合もあるが、客観的に見たら大変な状況の人に「大変だね」と言わないで欲しい
制度・施設・環境等の整備	<ul style="list-style-type: none"> ○相談しやすい環境づくり ○大人が十分に支援してあげられる環境を整えていって欲しいと思います ○高齢者や病気のある人を家族にもつ人の家庭を定期的に訪問し、介護者などを無料で派遣する
共助	<ul style="list-style-type: none"> ○地域の大人の協力体制といった子どもを支える仕組みが必要
啓発・広報	<ul style="list-style-type: none"> ○ヤングケアラーイベントなどを開催して、子供にも理解してもらおう ○ヤングケアラーについて理解を深めるため学校などで講演を開いたりする
その他	<ul style="list-style-type: none"> ○このような調査をしていって一人で悩む人が少なくなればいいと思います ○ヤングケアラーだと自分で気付けるように、もっと定義を明確にする ○ヤングケアラーだけを救うことはまた新しい問題を生むことにつながると思うので、本来の社会でのあるべき姿に戻すことが必要だと思います